
白銀聖騎士への盟約 pledge

活動休止

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白銀聖騎士への盟約 p l e d g e

【Nコード】

N 9 5 6 4 F

【作者名】

活動休止

【あらすじ】

作者ページに更新・改稿についての情報をあげました 武人の国『ヴァルエランス皇国』。その国でもっとも尊敬され、畏怖される者達。『白銀聖騎士』。騎士団を纏める、たった10人しかなることの出来ない部隊長というその称号。その1人に名を連ねると心に決めた学生。そして、その人を『白銀聖騎士』にすると決めた学生の物語。

プロローグ - 1

もう直ぐ、新しい日々がやってくる。

彼、レイヴ・ルフオシユタインは、飛行艇の中で心躍らせていた。この飛行艇の目的地は学園都市アーリアフェル。そして彼は、その学園への入学が決定していた。後1時間ほどで、アーリアフェルの地を踏むことになるのだと、この飛行艇の中に居る新入生達は同じ様な気持ちになっていた事だろう。

「でも、そんな平和には行かないんだなあこれが！」

剣の形を成した武器を持つ男。恐らくはリーダー格なのだろう。彼1人だけが座っていた。その姿に、乗客たちは怒りと恐れ of 眼差しを差し向けていた。男はその視線を嬉々として受けとめ、不気味な笑いを作る。

この飛行艇は今、ハイジャックされていた。乗員乗客は全て集められ、ロビーの床や椅子に座らされている。

「この飛行艇には、金目の物に、人質になる奴らも沢山だ。今の所バレてねえが……バレたらテメーらを一人ずつ殺してくって寸法さあ。国も、将来有望な学生達も乗せた船を見捨てようなんざ思わんだろっからな」

下劣な考え方だ。そして低脳でもあった。

この国にはもしもの時に白銀聖騎士団がいる。空軍の空戦艇に乗れば簡単に追いつくだろうし、白銀聖騎士といわれる小隊長なら、魔法だけでここまで来るなんていう荒業すら難なくこなしてしまいうさだ。

辺りを見渡せば、恐怖に支配された人々が身をすくめ、何人かの正義感に駆られた人々。殆どが彼と同じ新入生のような。が反撃の機会を逃すまいと周囲に気を配っていた。能力者も数人居る。大人の能力者に、まだ未熟な学生能力者が勝てると思えないが、それでも数を成せばなんとか出来ない事も無いだろう。唯一ダメだ

と言うのなら、無駄に殺気だっていてバレバレという所か。

今すぐ飛び出してさっさと片付けたい。レイヴはふと、そんなことを思った。こんな下手な、つまらない戦いを眺めるのもイラつくだけだ。……だが、戦わない。いや、戦えないと言った方がいいだろうか。

勝てなくは無い。せいぜい二十か三十人程度の空賊程度、義父に教わった技があれば物の数ではない。いや、戦えない理由はそれではない。彼は義父が死んでから、剣を握る理由が無くなってしまった。だから、戦わないのだ。

義父が死んだ。戦争に出て、そのまま帰ってこなかった。あの高名な傭兵にして、元白銀聖騎士団長『銀狼』が。

戦争孤児となった僕を絶望の淵から救い上げ、その技を教えてくれた。憧れだった義父が永遠に姿を消した。

義兄弟達も皆、それぞれがそれぞれの意思で去っていった。全員が義父を敬愛し、尊敬し、畏怖していた。それがたった一日で、何もかもがバラバラになった。

だからだろう。彼は剣を握る事に今は意味を見出せなくなった。

戦いたい。今すぐにでも戦いたい。

だがいつだって、義父の教えが邪魔をする。

意味無く振るう剣は、ただ人を傷つけるだけ。

だからこそレイヴは剣を捨て、この学園で新たなスタートを切ろうとしたのだ。丁度、料理に興味があった。そして、この学園には調理科があるし、ここは充実した寮生活もあるというから、入れる歳まで一生懸命に働き、お金を貯めて入学したというのに……。

その矢先にこれだ。

「さあて……知っているかなあ。闇市では、人間も売り買いできるんだ。金になるんだよ」

男がその言葉を放った瞬間、辺りがざわついた。つまりは、この船に乗っている中から売れそうな奴を連れて行く。そういうことだ。「全員連れて行きたいんだがなあ。さすがに飛行艇ごと盗めない。

男は腕つ節が良さそうで若い奴。女はまあ……体つきの良い奴だ」
下卑た笑みを浮かばせて、男が立ち上がり、乗客たちを物色し始める。

女性の方が多く連れて行かれるだろう。数人は売られ、数人はこの空賊に心身ともにボロボロにされ、廃人になれば適当に捨てられる。

「……おお？ 嬢ちゃん可愛いなあ。お兄さんの船に乗せてやろう」
男が一人の女学生に眼をつけた。

レイヴとは反対の窓側に彼女はいた。

金髪のショートカット。細い眉に猫の様なつり気味の眼。意志の強そうな感じの、とても整ったどこか気品の有る顔立ち。

可哀相に。

ポンとその学生の肩に男が手を置いた。その瞬間、周囲の新入生徒や大人が男に跳びかかるうとする。怯える彼女を助けなければという、一時の軽率な判断。それは正義ではあったが、正しい判断ではなかった。相手は空賊、そして能力者。一般人との力の差は、歴然たるものだ。

そして彼らは、止まる事となる。空賊によってではなく、あの女生徒によってだった。

「汚い手で触るな。ゲスが」

女生徒のその一言で。そのたった一言で場に冷たい空気が張り込む。その一言にムカついたのか、男は引きつった笑みでその腕に力を入れた。

「ああん？ なんだって？ もう一回言ってみ」

一瞬だった。ドンドドシャツと、最後の一文を言い終わることなく男は宙できりもみし、十メートル以上離れた椅子の後ろの壁に叩きつけられる。

レイヴは、眼を丸くしてあの女学生に視線を戻す。

常人には真似出来ない、魔力での身体強化だ。では彼女は、能力者か？

男の手下達がたじろぎながら、各々の武器に魔力を流し込み戦闘態勢を取る。しかし彼女は、とても静かで、落ち着いていた。

「汚い手で触るな。ゲスが。と言ったんだ。その顔の両端についてるのは何だ？ 飾りか何かか？」

レイヴは彼女の魔力が両手に集中するのを見逃さなかった。見逃せるはずもない。その魔力の量が、異常なまでに膨大にして濃厚だったからだ。

学園の新入生で、ここまでの量を出せる人物が居るはずが無い。

それに、彼女がこれから出すその武器が、彼には素晴らしく懐かしく想えたのだ。それは、自分が剣を握るきっかけであり理由だった筈の過去。

「まさかこの船に、能力者が一人も居ないなんて思ってたわけ無いだろうな？」

そう言いつつ彼女は席から立ち上がり、両手を前に突き出す。

すると足元に魔方阵が現れ、そこから二本の武器が現れ、彼女の手が届けられた。

銃口の先に剣を付けた、ガンソードと言われる銃。彼女のは、拳銃に七十センチほどの片刃の剣を付けた物だ。

拳銃タイプのガンソードは、超近接戦闘での火器の使用という拳銃としての利点を捨てることになる。ガンソード自体、現役の十人居る白銀聖騎士でも使っている人物は居なかったはずだ。

だが、歴代の聖騎士の中で唯一、使っている人物がいる。

「アーリアフェル学園の学生を乗せた船だぞ？ 幾ら高等部新入生だからといって、バカにしないで欲しい」

彼女は、肩幅より少し広く開けた脚の右足だけを後ろに下げ姿勢を低くし、右手を顔の前へ銃口を上に向けるようにして、左手は腰の後ろに当てて銃口が下を向くように構えを取る。

その構えにまた、懐かしさを感じる。まったく似てはいない。肩幅も身長も容姿も。何もかも違う。懐かしさを感じるあの構えさえ出来ているとはいえない。本来なら、足は一つ分後ろに下げるだけ

でいい。

でも、纏っている雰囲気は似ていた。全てを護ろうなんていう高慢な考え方ではない。見えるもの、手の届くものを護ろうという暖かさ。そんな物を感じる。

ガンソード使いの男であり、皇国史上最強と謳われた騎士でもあり、平和を愛し戦場に愛された傭兵、『銀狼』。

そして何より、頼りがいの無い僕の父。ヴァナルガンド。

何故。何故こうも彼女に義父を感じてしまう？ 武器のせい？
それとも雰囲気？

いや、違っただろう。

「が、学生風情がああああ……っ」

男がやっとの事立ち上がる。

近くに落ちた自分の剣を取り上げ、息を荒げて手下達の前に出る。手から流し込まれる魔力は、焦りのためか上手く武器には伝わっていない。

能力者は全員、武器の威力、硬度を上げる為に魔力を流し込む。

それは魔力の流れていない武器で押しとどめる事は出来ない。

「ふざけるなあああああつ！！！！」

男が走り出す。

女生徒は、冷静に右手のガンソードの照準を合わせ、引き金を引いた。瞬間、光の弾が男に直進する。彼女が注ぎ、銃弾となった魔力の塊が。

魔力のないものに、魔力を押しとどめる事は出来ないのだ。

男が身を護るようにして構えた剣は、魔弾によって悉く破壊され、威力を衰えさせないままにそれは彼の胸に当たる。

はじけ跳び、また向こうの壁に叩きつけられる空賊の男。

女生徒は仁王立ちになり、片腕を空賊達に向けた。

「貴様らを拘束する。大人しく隣の部屋に移れ。着陸するまで私が貴様らを見張る」

その時、微かに後ろの席で動く男が居た。彼女は気付いていない。

だがレイヴは。彼は気付いていた。

男は席を立ち、彼女の背後へと忍び寄る。その手には短刀が握られ、その顔には焦燥の汗がびっちりと滲んでいる。

乗客にまぎれて、まだ奴らの仲間が居たようだ。

彼女は未だに気が付かない。他の乗客も、手に持ったものまでは気付いていない。最初は正義感を感じていた人たちも、彼女の強さに頼って注意を怠っている。

三流が……っ！

そうレイヴが心の中で叫んだ時には、体が動いていた。

「おい、早く動かな
」
ドンッ。

彼女の背後で突然の衝撃音。彼女も含めた、その場の全員がその音の原因に注目する。

レイヴが、馬乗りになつて男を押さえつけていた。その右腕には短刀が握られていて、男はうめき、もがき、青年のわき腹に何とかナイフを差し込もうと力を入れている。

彼は小さく呟く。

「グズが」

雷系魔法、帝王の鎧・雷鎧^{らいがい}。

一瞬、魔方陣と共に彼の体を雷が纏い、今度はバンッという衝撃音が響いて男が失神する。

手下達がまたたじろぐ。

彼らも、この男を使つてならいけると感じていたんだろう。だが、計算外だった。学園の新生入生にしては抜きん出ている能力者が、もう一人居た。

『雷鎧^{らいがい}』。

鎧とは言っているが、実際は防御よりもスピードと破壊攻撃に重きを置いた魔法であり、瞬間的な雷を継続させるという雷系でも高
等な魔法でもある。

けっして、学生にもなっていない様な者が出来る生半可な魔法で

はないはずなのだ。

出来るのは、相当の手錬てだれのみ。空賊ごときの荒くれ者では、到底身につける事が出来ない魔法だ。

幸福な事に、この空賊は能力者が多く魔法に関する知識が多い。無闇に抵抗するものは、これ以上は居なかった。

「……見たところ調理科のようだが、戦闘科の方が向いているんじゃないか？」

彼女がレイヴの制服を見てそう聞いてきたのは、空賊全員を隣の部屋へ閉じ込めた後だった。彼らも今、その空賊たちと同じ部屋で見張っている。空賊は、奥のほうで意気消沈といった感じた。

アーリアフルでは科ごとに制服が違う。能力者が騎士となるための勉強をする戦闘科、能力者の紋章呪文とは違う詠唱魔法を学ぶ魔術科、一般人が兵士や能力者でなくても扱える簡単な魔法を習う兵士科、料理などを学ぶ調理科、そういった食品を栽培育成する農業科、技術的な事をならう技術工学科、実験的な事をする化学科など、沢山の科が存在するのだ。彼女のは、黒を基調にしたブレザーにスカートで、一年生であることをあらわす赤のラインが入っている。

レイヴは自分の制服を見て、少しだけ苦笑した。

「僕は、剣を捨てたんだ。戦う理由をなくしたんだよ」

「理由……か。お前の理由はなんだったんだ？」

「家族、かな。それを失った。だから剣はもう必要ない」

彼の顔がどこか寂しそうな色を見せた。

いけない事を聞いた。彼女はそう感じた。家族を失ったといった。それは相当なショックだったに違いない。

「……すまない。嫌な事を聞いたな」

「え？ ああ、いや。失ったって言うのはそういうのじゃないんだよ。まあ父さんが死んでしまったんだから、失ったって言うのもあるのかな？」

どこか懐かしそうに、レイヴは自分が戦争孤児であった事。義父に拾われた事。多くの家族が居た事を話した。だが、彼は自身の義父が『銀狼』であったという事は話さなかった。言いたくなかったのではない。

ただ、そんな事はどうでもよく思っていた。

ただ、昔のことを気持ちよく喋っていたかった。

その間、彼女はジツと彼の目を見て話を聞いていた。

彼は家族が居た事を話している間、ずっと楽しそうで、子供の様に優しい笑顔をしていた。それを見ているだけで、こっちまでも笑顔になってしまふような笑顔だった。彼が同じ学校であるというだけで、少しだけ、彼女はこれからの学園生活の楽しみが増えた気がしていた。

「理由なき剣はただの凶器であり、それを使う者の心は狂気している。これは僕の義父の言葉ね。僕理由は家族だった。でも家族が居ない今、僕には理由が無い。僕は狂気に捕らわれては居ない」

「だが、お前は私を助けたじゃないか。お前の理由では無いだろうに」

「そう。まったくもってそうなんだ」

レイヴは微笑し、彼女は不思議そうにその顔を見る。

だが、彼は彼女を助けたかった。

あの武器が、構えが、彼女の纏う雰囲気がそうさせた。そうであれば、動かなかったかもしれない。いや、きっと動かなかっただろう。その事に対して、自分は冷たい奴だとは思わない。でも、父に拾われたように変わるかも知れない。彼女がこれからの学園生活に居るのだと思うだけで、変わる気がした。

武器を。剣をもう一度握ってみよう。そう思えた。

プロローグ - 2

魔法……古来より存在し人間とともにあったモノでありながら、そのほとんどが謎につつまれた存在。それを扱える者は能力者と呼ばれ、それを扱い戦う存在は騎士と呼ばれていた。銃弾にも砲弾にも耐えてみせる彼ら騎士は、どんな兵器よりも一線を画す存在である。

そしてここ、魔性発祥の地である『フィールズウエル大陸』には、人間から魔族、果ては竜族までのありとあらゆる種族が存在し、大小さまざまな国家を形成している。

そして今、大陸最大最強を誇る『ヴァルエランス王国』では、騎士同士の戦いが繰り広げられていた。

十

膠着状態に落ち着いている戦いを始めてから、六日と二十三時間五十分程が経過したある日。彼。ヴェイン・アルシュメッツ・バルトフェルドは、息一つ切らす事のなく対峙している相手に内心苦笑していた。

しかし、かく言う彼も息を乱してすら居ない。一睡どころか、休憩すら取っていないというのに。

これが、この武人の国『ヴァルエランス王国』最強の騎士団、『白銀聖騎士団』の隊長同士、つまりは、『白銀聖騎士』の戦いである。遠くのモニターで観戦している観客も、何時終わるとも分らない戦いを静寂の中、固唾を呑んで見守っていた。

先に動いたのは第四部隊長、イエラ・D・ヘルムだった。誰も素顔を見たかが無い、眼だけを覆う鉄くろがねの仮面を着けた謎の女性隊長だ。

白銀聖騎士団の隊長格である事を示す純白のマントを風に少しだ

って靡かす事すらなく、ただ棒立ちの彼女の冷淡な魔力が動くのを、対峙するヴェインは見逃さない。

コンマ数秒の後れ。

彼はスピードの速い雷系統の魔法を形成しつつ、彼女の懐目掛けて走りこむ。手のひらに光を生み出し、それが魔方陣を描く。

雷系魔法、雷神槌。らいじんづい

ヴェインが少し先に魔方陣を完成させる。

彼の右腕で電撃が連続で弾け始め、脚で地を蹴りその腕を振り上げる。その瞬間、イエラを中心に地面に巨大な魔方陣が現れた。

氷系魔法、氷牙・狩り。ひょうが

彼をドーム上に包む様にして、氷牙が出現し全てが彼目掛けて直進する。しかし、そんな事は関係ない。彼の腕には雷で出来た巨大な槌が繋がっていた。それを彼女の顔面目掛けて、氷牙さえ巻き込んで突き進んでいく。

跳躍。

バチバチと跳ねる雷を纏わせた腕を振るい上げる。ヘルムは、それを少しでも細く雪の様に白い腕で防ぐ素振りを見せて、閃光の中に消えた。

手応えあり。

彼は反動を利用し、空中で回転するように雷が開けた氷牙の隙間から飛び出す。彼を狙った氷牙が、そのままヘルムに激突していく。瞬く間に、彼女は氷に閉じ込められた。

着地。すぐさま反転し、右腕を真横に突き出す。

彼の足元に魔方陣が現れ、そこから大きな処刑鎌が現われた。

遠い観客席で、ざわめきが起きる。彼の手握られたのは彼の武器『デスサイズ』。

宝具というそれぞれが唯一無二の能力を持つ、希少価値の高い道具の一つだ。

彼が決着をつける時、決まって出す物だった。

アレだけで倒せるほど弱い人ではない。もちろん、自分の魔法で

死ぬようなへまもしない。恐らく、良くて全身が微かに痺れ、火傷を負った程度。悪くて……。

「……行け」

無傷。

氷の中から細い声が聞こえ、爆発に似た衝撃。砂煙が上がり、その瞬間に中から黒い帯が2本、彼の目前に迫っていた。瞬間的に左へ回避。1本が地面に突き刺さり、刺さった部分が爆散する。もう1本が角度を変えてそのまま貫かんと追いかけてくる。

速い。

彼は砂煙を上げて後ろへ振り返るように飛ぶとそのまま回転、体を半捻りさせる。帯は砂のせいでそのまま直進し、目標を見失う。

今度は帯の上に着地。そのままその上を駆け、デスサイズを右下に構える。次の瞬間、ボンツと、彼の足が着いた部分が、足を上げるのとはほぼ同時に次々と爆発していく。しかし彼は、微塵も怯むことなく帯の上を走た。

砂煙が晴れ、彼女の姿が鮮明になりつつある中。彼はその後ろに更なる存在を確認した。

黒衣に身を包まれ、仮面舞踏会用の仮面の様な物までつけた、彼女だけの武器。その黒衣からは、無数の帯が伸びている。

『影の王』。

どうやら、彼女もそろそろ終りにしたいようだった。

残り時間は、十分を切っているのだから。

今度は六本の帯が襲ってくる。脚に魔力を流し込む。瞬間。彼の脚力は強化され、先行した二本を容易く突破した。

「……」

左手を前に突き出して魔法陣展開。

炎系魔法・守火^{しゅひ}。

炎が渦を成し、その手の前で広がった。

防御魔法。残った4本の帯は、その中に飛び込んだ。爆発。炎の盾が爆風でかき消され、視界が晴れる。だがそこに、彼の姿は無い。

上空から魔力の気配。彼女はゆっくりと上を見た。

ヴェインは炎で視界を遮り上空へと跳躍していた。彼の左手の更に左が光り、巨大な岩の拳が空中で、彼に並ぶようにして現れる。

土系魔法、巨拳・潰きょけん かい。

左手の振り下ろされる動きに呼応して、その拳がヘルムを襲う。

ゴゴンという、激突による地響き。彼女は何の抵抗もなくそれに潰された。

拳が砂と化し崩れ消えり、完全になくなる手前に、少し離れた場所へヴェインが着地する。彼女の居た場所には、キラキラと光を反射する氷の結晶だけが舞っていた。彼女の体は無い。

「……っ！」

背後から殺気。咄嗟に鎌を弧を描くように振りかざしながら背後を見る。

黒い帯が、彼の首を掠っていた。血が徐々に滲み出てくる。そして彼のデスサイズも、彼女の後ろ首に回り込むように当てられていた。

その次に、終了を告げるブザーが大地に鳴り響いた。

十

先の熱戦冷め遣らぬ中、二人の隊長は揃って王宮の謁見の間にて皇帝からの命を受けていた。しかし、その命が書かれた書を読み上げているのは皇帝ではなく、その側らに居るヴェインらの直接的な上司、白銀聖騎士団第一部隊長にして団長、セレ・パーシバル・ヴィヘレントであった。

皇帝の席とヴェイン達の間には薄い布がたれ、皇帝の姿を見ることは出来ない。

団長を除いて、彼らは数年に一度、必ず二人が配置換えされ。それまで辺境騎士団や軍だけで防衛していた様な場所にも派遣されたりもする。

それを決めるまでの間、配置換えされる二人は決まって先の様な戦いをするのだ。会議は平均して一週間ほど。それが終わるまで、一睡の休みも取ることなく。

セレが受け取った書類を広げ、

「白銀聖騎士団第七部隊長、ヴェイン・アルシユメッツ・バルトフェルド。今日より貴君は学園都市アーリアフェルでの防衛任務、そして特別教員の任に就く事となる。異論は？」

「御座いません。皇帝陛下」

どういう命令であろうと、団長以外に平時での彼らには皇帝からの命への拒否権が無い。

彼は片膝をついた状態で指を揃えた右手を左胸にあて、頭を垂れた。

「同じく、白銀聖騎士団第四部隊長、イエラ・D・ヘルム。今日より貴君は、工業都市デアセラでの防衛任務となる。異論は？」

「……御座いません。陛下」

ヴェインと同じ様に、彼女も礼をする。

この時でさえ彼女は仮面をとらない。そして誰もその事を咎めはしない。

彼ら白銀聖騎士団の隊長達には、常識では考えられないような権限と影響力があるのだ。皇帝にも勝るとも劣らない実力を持つ、十人の隊長。一国の皇帝はそう易々と地方へ遠征できない。その為、その地で限りなく皇帝に近い権力を持つ者たちが治安を維持する事により、その都市周辺を改善していく。それこそが権力を与えられている理由なのだ。敵国が攻め込んで来たとしても、国境付近に居る彼らが即時に対応できる事もある。

神官の格好をした老人が二人、皇帝から書を受け取り、彼らへと運ぶ。

それを受け取ると、ヴェインとヘルムは書を両手で掲げ、礼をした。

所は変わって、数日経った学園都市アーリアフェル。その中心に位置するアーリアフェル学園。

「え、ええ、先生方にお知らせがあります」

小太りの教頭が、いつも以上に、後退した生え際から汗を流して教職員達の前に出る。職員達は皆、視線を教頭に注ぐ。教頭は何かに怯えているようであり、とても心配しているようである。

その場に居る全員が怪訝顔をする。何をそこまで怯えているんだろうか。生徒の誰かが、とんでもない問題行為でも起こしたのだろうか。

しかしてその教頭の表情は、次の瞬間には全員が理解し同じ様になるのだが。

「お、お入り下さい」

両開きの扉が開き、足音なく誰かが入ってきた。

教頭の丁寧な言葉の先に居たのは、一人の爽やかな笑顔を見せる青年。純白のコートに、首から下がる十字架のペンダント。左肩だけにつけられたシオルダーアーマーには、白銀聖騎士団を示すマーク。

全員が教頭の表情と同じ表情になったのは、この瞬間だった。

「本日より特別講師として戦闘科を受け持つ事になりました」

凜とした気品の有る立ち姿。少々長く後ろで纏められている黒髪。ニツコリと、閉じている様にも見えるほどに微笑んでいる眼。形の良い鼻の下には、両端が微かに上がった口。細い顎。いかにも人の良さそうな、それでいて少し危険な気配のする笑顔を湛えた男。「ヴェイン・アルシュメッツ・バルトフェルドです。これからしばらくの間、どうぞよろしくお願いいたします」

ヴェインは、深々と礼をした。全員がその瞬間に起立し、また深々と礼をした。

教頭は頭が痛いことだろう。一教師でさえこれからが心配になっ

てきたのだ。学園長はそうは思っていないだろうが、これはもう一大事だった。

その時、教頭に近い電話が鳴り響く。

「も、申し訳ありません……」

ああ、過敏になっている。

「？ それよりも、早く出たほうが宜しいですよ？」

「は、はい」

教頭は受話器を取り、少し裏返ったような声で「もしもし」といった。だが、彼は二、三度返事をした後、徐々にその表情がこわばっていく。受話器を置いた時には、顔色は青いというか、蒼白だった。

「た、大変です。バルトフェルド様」

「いやいや、ヴェイン先生とかでいいですよ？ 先生って言われるの、ちよつと懂れてたんで」

「は、はあ……いやいやいや！ そんな暢気な場合じゃありません！ 新入生も乗せた飛行船がハイジャックされたと報告が来たんですよ！ ああ、また問題が……」

そのまま、教頭の視界は斜めになり、仕舞いには床と平行になった。

「教頭先生！？ ほ、保険のダレン先生を！ 早く！」

誰かがそう叫び、数名が教頭に駆け寄る。足の速そうな教師が職員室から飛び出していった。

そして、大半の教師は飛行艇のハイジャックという単語にまた焦っていた。

「ふむ……ハイジャックですか。これはまた思い切りましたね」

「ヴェ、ヴェイン先生、そんな暢気な！」

「そうです！ とりあえず飛行場に行かないと。ああ、でも行っても何にも出来ないなんて……」

教師達が嘆きだす。

「そんな事言ってないで。何人かの教員は飛行場に行きますよ！」

ヴェイン先生も行き……あれ？」

場の空気を何とかしようとした教員が言葉を止める。辺りを見渡し何かを探している。

「ヴェイン先生は？」

閉まっていた筈の職員室の窓が一つ、開け放たれていた。

+

「……は？ 解決した？」

ヴェインが到着した頃にはもうすでに、飛行艇は発着場に着いていた。乗客も無事に降りてきている。

「はい。何でもそちらの学園の生徒が二人で解決したらしくてですね。いやいや、空賊を二人で倒してしまうなんて、今年有望な生徒さんが入ったもんですよまったく。あ、奥さん！ 荷物は我々がお届けするので、機内には戻らないでくださいーい！」

若い係員は拡声器を口の前に出してそのまま何処かへ行ってしまった。ヴェインが白銀聖騎士だということにも気がついていない様子だ。

まあいいさ。うちの学園の生徒だというんだ。何時だって会う機会はあるだろう。

彼は踵を返し、姿を消した。

第1話 再会

しまった。彼の名前を聞いていなかった。それに、自分の名前も言っていない。学寮についてからその事に気がついた。しかも、助けてくれた事にお礼を言っていない。これはまずい。

そう思いながら、教室のドアを開けて席に向かう。

彼女の名は、ニーナ・アランドール。昨日のハイジャックで活躍した女生徒である。

彼の制服は調理科の物だった。という事は調理科の寮に居るだろうが、この学校は初等部、中等部、科で分けられる高等部、大学院とエスカレーター式で構成されて居り、全校生徒数は万を超えらるも聞く。寮はそれだけ沢山ある。勿論クラスだって違ふのだ。礼を言う機会は今なさそうに思えてくる。

「むう、どうするべきか」

その事に、入学式の間ずっと考えていた。

講堂を出た後も、入学式の後に発表されるという順序が逆な気がする。クラス割を確認した以外に他の事をした記憶も無い。ずっと考え込んでいるのだ。

自分の席に着いてからも、腕を組みジッと机の一点を見つめて考えていた。

「むう……どうするべきか」

「どうかしたの？」

そんな彼女を不振がってか、誰かが話しかけてくる。多分、さっきから隣の席に座っている男子だ。彼女は顔を向ける事なく、それに返答する。

「ああ、昨日飛行艇で知り合った恩人に礼を言っていないくてな。同じ新入生の様なんだが、名前も分からなくて困っている」

「そう。それは困ったね。名前が分かれば、先生に言ってクラスを教えてもらえるのに」

「そうなんだ。我ながら致命的なミスだと思う。どうすれば良いと思う？ そいつは調理科なんだ……が……」

そこでその話しかけてきた人物に振り返って、ようやく顔を見た。そして、言葉が詰まっていくな。

目の前に居たのは、昨日のあの男。レイヴだった。しかし彼は別人の話だと思っているのか、真剣に悩んでいるようだった。

「調理科か。そうだねえ……顔が分かるんだったら似顔絵とかは？」

「そうだな。貴重な意見をありがとう。で、貴様、名前は？」
ほぼ棒読みで言ってる。

貴様といきなり言われて、顔をしかめない奴なんていないだろうが、彼は特に気を悪くした風もなく答えてみせた。

「ん？ レイヴ・ルフオシユタイン。よろしく」

「そうか。ではレイヴ。私がそいつの特徴を言うから、似顔絵を描いてみてくれないか」

「ああ、ちよつと待って」

彼は鞆をあさり始め、ノートとペンを取り出した。

そして、彼の顔を覗き込むようにしながら、彼女は特徴を出していく。

「ではまず、そうだな。髪は私と同じくらいの長さだ。少し長めの眉に、優しいような眼。整った鼻と口。顎は細いな」

「……これは」

気がついたか？

心の中でのガッツポーズ。レイヴの顔は、驚きに満ちている。これは気がついたのだろう。

「誰だろう」

「お前だお前！」

思わず椅子からずり落ちそうになるのを堪えて大声を出す。レイヴは実に楽しそうにそれを見ている。その手に持っている絵は、まあ似ているとは言えない出来だったが。

「ん？ つてことは、君は僕を探してたの？ えっと……」

「ニーナだ。ニーナ・アランドール」

「アランドール……？」

レイヴは、アランドールという名で一族を思い浮かべていた。

アランドール。ヴァルエランス皇国の有力貴族であり、アリシア・サンディラート・アランドールという白銀聖騎士を出した騎士の家でも有る。そして、アリシアには妹が居るらしい。それが彼女？ あの実力ならば間違いないかもしれないが、アランドールなんていう名前もその一族だけしかないわけではない。それに、アランドール家なら専用の家庭教師を抱えているはずだ。ここにくる必要もない。

そこで彼は言いたかった事を思い出した。

「そういえば、昨日名前言うのも聞くのも忘れてたね。これからよろしく」

実際にはきはきとした様子で言う。

しかし、少し昨日とは雰囲気が違う気がするような印象をニーナは受けた。

そんな事を感じていた時、予鈴が校内に鳴り響く。

その日の放課後。といっても、授業もなくただ入学式とクラスメートの顔合わせだけがなく、午前中で学校は終了した。

そういえばレイヴは調理科のはずだ。制服だって昨日は調理科の物を来ていた。今は戦闘科騎士学部制服を着ている。

「どういう事だ？」

適当な店に入り、席に座りながらコーヒースタンプの入ったカップを口に運びつつ質問する。

オープンカフェだ。日差しの中、風が心地よく通っていく。

小さな丸テーブルを挟んで向かい側に、レイヴが同じコーヒースタンプを

ブラックのまま飲んでいた。彼女は猫舌である。何故アイスコーヒ―や他のものを頼まなかったのか。それは、軽い対抗意識である。彼がブラックで飲めると知って、同じ物を頼んだ。だが、一口飲んだだけでスティック入りの砂糖2本とミルクを1個分入れてしまった。そして、飲むときも息を吹きかけてからだ。もう一度だけ握ってみようと思えたんだよ。理由はまあ、出来たっていえば出来たし」

ああ、それでか。と納得する。

彼が生き生きとして見えるのは、本来の、能力者である自分に戻れたからだろう。理由。それが出来たお蔭で、彼はこうしていられる。その理由を作ったものが何なのかはわからないが、実に喜ばしいことだ。なぜかそう思う。

「だが、そんな簡単に変更できるのか？」

「昨日の事件、先生方も知ってたみたいだね。戦闘科に変更したいですって言ったら、是非にと言われたくらいだよ」

実力有る能力者なら戦闘科に欲しいと考えるのは普通のことだろう。そいつが白銀聖騎士団にでも入れれば、それを出した学校や一族は一気に知名度が上がる。

「ほう、名前まで知られていたのか」

「乗客の情報と座席を確認すれば誰か分かるんだろうしね」

レイヴがカップを口に運び、それに合わせる様にしてニーナもフ―ッと息を吹きかけてコーヒ―を飲む。

彼がカップを置くと、目の前には顔をしかめたニーナの顔。

「そんなに熱いの苦手なら頼まなきゃ良いのに。あ、苦いのがダメなのかな？」

「……どちらも苦手ではない」

悔しそうな声だ。

「そう。それはごめん」

微笑してまたカップに口をつける彼を、恨めしそうに見るニーナ。ふと、彼女は辺りをキョロキョロと見渡す。

「なんだか、色々な人に見られている気がするのだが。……何かしたのか？」

「……昨日の事件じゃない？ あの船、生徒も居たんだし。噂が広がるのは早いねえ」

そう、彼らは色々な人たちから見られていた。最強コンビ。ハイジャックを解決した新入生。そんな噂が学園内に広がるのにはそう時間はかからなかった。現に、彼らが人並みを見ればあからさまに視線を逸らす人とそれでもまじまじと見つめる人がいる。

剣銃使いの女子生徒と、『雷鎧』を使う実力未知数の男子生徒。他の人たちにはそう知られているらしいと、レイヴは彼女に教えてやる。すると、彼女は顔を真っ赤にしまった。

「な、なんだか恥ずかしいぞそれは」

顔のほてりが治まらず顔を伏せてしまう。すると、視界の端に数人の足がつま先をこっちに向けて近づいてくるのが見えた。そしてその足は、自分達の直ぐそばで止まる。

「剣銃使いに『雷鎧』を使うっていう1年だな？」

頭の上から降ってくる言葉。頭を上げ、その姿を確認しようとする。

声の主は大柄な男子生徒。襟章からして高等部3年。他にも数名の男子生徒が、そいつの後ろにいた。後ろの奴らは、総じてニタついていた。多分だが、これからイチャモンをつけられるだろう。

彼女はそう予想し、敵意のこもった眼でその上級生を一瞥してから、レイヴに視線を移す。

「ええ、そうらしいですね。……そういえば、ケーキ頼んでたよね？ 遅いね」

一言だけ男に返して、実に余裕に構えていた。こういうのに鈍感なのか？ 明らかに危険な感じをかし出しているというのに。

すぐに、店員がケーキを一つ持ってやって来た。それをおくと、礼をして足早に去っていく。店員も嫌な空気を感じたんだろう。

「おい、聞いているのか」

「ええ、聞いてますよ。さつきも返事したじゃないですか」

ニーナはケーキに手をつけないまま、相手に見えない右手に魔力を集中させていた。いつでも空間転送で武器を出せる。

「1年……調子に乗るなよ？」

男の右手が剣を抜いた。刀身がレイヴの顔面すれすれを横切る。

他の男達も自前の武器を出し始める。周りの生徒達が、さすがにざわつき始めた。

「貴様等っ！」

「ストップ！」

ニーナが立ち上がろうとした瞬間、レイヴが落ち着き払った様子で言った。

「何か御用ですか先輩。時間が惜しいので、簡潔に述べていただけると有り難くて泣いちゃうんですが」

「お前等が調子に乗ってるから、ちよつとしごいてやるんだよ」

「調子に乗っているというのはどういう意味ででしょうか？」

「色々噂されてさぞかし良い気分だろう？　それが気に食わないんだよ」

「良い気分であつた所を見ていたんですか？　ストーカーですかあなた達は。気持ち悪いですね。見ていないんだつたらそれはただの想像であつてあなたの世迷言に付き合っている暇もなければ時間も有りません。それに実際良い気分にはなってます。良い気分です。たとしてもあなた方に会つたおかげで台無しです。出来れば帰っていただきたいのですがどうでしょうか？　というか帰ってください」

そこまで一息で言ってみせ、ニツコリと大柄な男を見る。男の額に血管が浮き出て、無言で腕を振り上げた。瞬間、男が消え、同時にレイヴまでもが消えていた。

衝撃音。大柄な男の後ろに居た男達が、後ろを見る。ニーナもその視線を追うように見た。

レイヴが、あの男の首根っこを引っ掴み、自分の一回りは大きいその体を壁に押し付け、軽々と持ち上げている。

見えなかった。誰しも、最初は何が起こったのかすら理解できなかっただろう。空間移動でもしたような速さだった。

彼はとても冷たい眼で男を見据えていた。

彼の額に、光りを伴って魔法陣が現れる。

雷系魔法、帝王の鎧・雷

「そこまでにしなさい。レイヴ・ルフオシュタイン」

静かで良く通る声。その場に居た全員が、その声の主に視線を向けていた。

今までのざわめきが、別のざわめきへと変化する。気がついたのは小数だろう。だが、その少数からざわめきが確実に広がっていく。

「ば……かな……何で、何でここに……」

眼を丸くし、驚きで表情をいっばいにするレイヴ。

男の首を掴んでいた手が緩み、男がレンガの道の上に落ちて咳き込みながら丸まる。

「いや、間違えたね」

そう言って彼の目前で止まると、腰を少し曲げて彼の耳元に口を近づける。

「……我が弟、レイヴ・ルフオシュタイン・“バルトフェルド”」

ニツコリと笑う顔。純白のコート。ロザリオのペンダント。

白銀聖騎士団第7部隊長、ヴェイン・アルシュメッツ・バルトフェルドが、そこには居た。

第2話 約束

「久しぶりですねえ。レイヴ。最後にあってから……何年になるのかな？」

笑顔を崩すことなくヴェインは考えるしぐさをする。

いつもこうだ。何を考えるにしても、彼は真剣ではない。すべて分かっていても、あえて相手に問う。

彼は笑顔で相手を油断させ、痛みを感じさせること無く静かに息をするかの様に相手を殺すサイレントキル、暗殺のプロ。その魂だけを持ち去る様な芸当から、傭兵時代には若くして『笑う死神』なんて異名まで持っていた程だ。

「さあ？ 思い出話をしたら老けるよ」

レイヴは目の前に置かれた紅茶の水面だけをジッと見つめて答えた。

ここは学園の応接間。外から案内されてここまで連れて来られてしまった。上質なソファと、シンプルなテーブル。窓際には観葉植物が置かれ、壁には何処かの画家の絵が飾られている。

「はは、では話題を変えましょう」

紅茶を一口飲んで、ヴェインはまた微笑をレイヴに向ける。その隣に座り、黙りこくっているニーナにも同様に。

彼女は混乱していた。さっきまで自分と話していた相手が、白銀聖騎士の1人と対等のように会話しているのだから。

「生徒名簿に名前を見つけたときは驚きましたが……まさか戦闘科とは。剣、捨てたんじゃないのかい？」

この質問がやってきた。

レイヴは視線を上げてヴェインをみる。笑顔だ。これはどっちの笑顔だろうか。本当の笑顔か、笑っていない笑顔か。それを探ろうと、見つめてしまう。

「？」

彼はニツコリトしたまま右へ首を傾げる。

本当の笑顔のようだ。

突き刺すような感覚が無い。そして、彼は気が付いているのかは知らないが、笑っていない笑顔の時は決まって左へ首を傾げるのだ。「理由。いや、もう一度戻ってみようって思えるきっかけがあったんです」

「……へえ」

ヴェインの視線の先が替わり、ニーナを上から下に行ったり来たりしている。彼女も何で見られているのか分からず、場違いな気がしてならないようでそわそわとしている。

そんな事はお構いなしといった感じに、ヴェインは言葉をつむぐ。

「ニーナ…… K・アランドールさん。でしたね？」

「は、はい」

彼女の体がビクツと反応する。

「驚いているでしょう。すみません。お姉さん、相変わらずお元気ですよ。連絡取ってますか？」

その言葉で、彼女の表情に一瞬焦りの様な色が見えた。

この人は白銀聖騎士だ。姉と知り合いでもおかしくは無い。だが、私の姉が彼女だと知られたくは無かった。

「……いえ、その、その事は……」

「ああ、禁句でしたか。申し訳ない。……ふむ、まあ、レイヴも同じ様な事を隠しているの、大丈夫ですよ」

「……は？」

彼はレイヴに確認するように視線を向け、レイヴは諦めた様子であからさまに視線を逸らし、ため息をつく。

ここに彼女まで呼んだということは、そういうつもりだったんだろ。お互いの存在を明らかにさせる。何の為だかは知らないけど、余計な事をしてくれる。

「私達は兄弟なんですよ。まあ義理、ですがね」

彼女の口があんぐりと開き、レイヴに視線が向く。彼は苦笑して

紅茶の入ったカップを口に付ける。

ヴェインは、微笑を崩さずにその光景を眺めていた。

「フフ、初日からお友達が出来たようで、兄としてはとても喜ばしいですよ。ニーナさんも、これから弟と仲良くしてやってください」

しばらく嘘かホントか分からないような昔話と、これからの学園生活について話した後、彼はそう言って出て行ってしまった。

応接間には2人だけが残され、先に部屋から出たのはどっちだったろう。そのまま寮への道を歩いている。何処まで同じ道なのかは分からないが、それでも2人だった。

辺りはもう夕暮れになり始めているというのに、友人とつるむ者、恋人と談笑する者、新入生を部活に勧誘する者が多く居た。

だが、ここだけは気まずい空気。その空気の中で、彼女は考えていた。

あのヴェインと、レイヴが義兄弟。という事は、レイヴの義父というのはあのヴァナルガンド・フェンリスヴォルフ・バトルフェルドという事になる。あの『銀狼』という事になる。能力者の誰しもが一度は憧れる存在。それを間近で見てきた奴が、今隣で歩いている。

「アランドールって、やつぱりあのアランドールなんだ」

レイヴが沈黙を破り、そう言った。その眼には教室での明るさが戻っている。彼女は首だけで肯定する。

「聞くのもなんだけど、何でこの学園に？ お抱えの家庭教師が居るだろうに」

「恥ずかしい話だが……姉に負けたくないと言ってな。父と大喧嘩の末に飛び出してきた」

頬を軽くかいて少し朱に染まりながら苦笑する。

「私はな、お前の父に憧れていたんだ。聞いた情報だけで、武器とその構えを真似して必死になって練習した。白銀聖騎士になりたいんだ。お前の父の様な騎士に。だから、それに近い位置に行ってしまつた姉に嫉妬した。姉には才能があつた。天才という奴だよ。一度見ただけで技を理解してしまう。そんな才能にも嫉妬していた」
私は努力しても、まだここまでしか来れて居ないというのにと、彼女が小さく呟いた。

その時の表情を見て、彼は剣を握る理由に、また1つ。たつた1つ追加する事を決めた。

「君ならなれるよ。うん。君なら」

レイヴは無責任とも思えるほど、簡単に言つてのけた。彼女は横目だけで彼の顔を見る。彼は空を見上げていた。もうあんなに低い位置に太陽がある。

「ほう？ 簡単に言つてくれるな。何時なれるんだ？ なれなかつたらどう責任を取る？」

「ええ？ 僕が責任を取るの？ それはあんまりだなあ」

「なれると言つたのはお前だろう。当たり前だ」

深いレイヴのため息。その後、彼はまた言つた。

「絶対なれる。だから、責任は取らない」

「だから何で」

彼女は足を止め、レイヴも少し先で足を止めて振り返る。いつの間にか、彼女の寮の前まで来ていた。

両手を腰に当てて、下から覗き込むように腰を曲げるニーナ。その表情は、悪戯っぽい笑顔で満たされている。

レイヴは微笑を浮かべる。

「だって、僕も協力するんだから」

「は……？」

その発言に、虚を突かれた様な顔になるニーナ。彼は言葉を続ける。

「約束する。僕は、君を絶対に白銀聖騎士にしてみせる」

「な、なな……何を」

「君は父の様になれる素質がある。だから、僕は君が騎士になるのを隣りで見ていたいんだ」

彼の微笑がより増した気がして、彼女は身を起こしてすこしふら付いた。

自分でも分かる程に顔が赤い。夕日がより一層それを増しているようにも思う。

「……ん、もうこんな時間か。それじゃ、また明日教室で！」

「ま、待て！」

彼は腕時計を確認して、そのまま二ーナの寮に走って入っていつてしまう。突き出した右手は、力なく下を向く。

十

二ーナは同室の生徒が居ないおかげで、2人部屋を1人で使っていた。男子は有無を言わず1人部屋らしく、彼女としてはそっちの方が良かったのだが、広い部屋を1人で占拠できるなら此方よかったと思う。

部屋に入っても、彼女はしばらく顔が高揚して赤いままだった。

ベットで仰向けになって、足を空中にぶらぶらと投げ出している。自分の熱でも測るように、手の甲をおでこに当ててていた。

あんな恥ずかしいセリフをよく簡単に言っただけのものだ。あれじゃあまるで……。

「まるで告白されたみたいじゃないか……」

言っただけで恥ずかしくなる。

実際は違っただろう。あいつは多分、鈍感の部類にはいる人間だ。だから、あれは告白ではない。そう自分に言い聞かせる。

しかもどうということだ？ 彼もこの寮だった。

いや、確かにこの寮は男女共同だ。しかも、家賃が安くて男女のエリア分けすらされていない。居たとしてもおかしくないのか……。

風呂に入って気分転換しよう。そう思ってたベットから降りる。
気を紛らわすように鼻歌交じりに部屋を出ると、1階の風呂へと
向かう。

まあ、気にする事はない。風呂から上がった後は共有スペースで
何か飲んで、その後にゆっくり今日の事を整理すれば良い。

十

「ケスター様。アルシユメツ様より通信が来ております。いか
がなさいますか？」

そう侍女が中庭までやってきて告げてきたのは、深夜2時を過ぎ
ての事だった。

彼は暇な日は夜遅くまでこの中庭のベンチに座り、夜空の中、そ
の側に1本だけたっている外灯と月や星の明かりで読書をしながら、
日の出を待つというささやかな楽しみが、ここにやって来た数
年で身についていた。この中庭は、小高い丘の上に建つコの字型の
屋敷の中で一番綺麗に日の出を見ることが出来るスポットなのだ。

今日と明日は数少ない暇な日。風も心地よく、ゆっくりと読んで
いられると思っていたというのに、その時間を割くようにして通信
を入れてこなくても良いだろう。と、心の片隅で呟く。

だが、彼もそれだけで機嫌を悪くする程出来ていないわけではな
い。本に琴を挟み閉じると、背もたれに掛けていた純白のコートを
羽織り、その内ポケットへと本を入れる。

彼の右手だけには純銀製のガントレットが装着され、その甲の部
分には第2部隊を表すマークが誇らしげに掲げられている。

「出よう」

一言だけで返し、彼、クエイ・ス・ケスター・バルトフェルドは、
コートを風にそよがせ、威風堂々とした歩みでその場から立ち去っ
て行った。

第3話 銀狼の子として……

牛乳瓶を片手に共有のキッチンから、ノースリーブタイプのＴシャツと、それと同じ色のハーフパンツ、首にはタオルをかけて風呂から戻ってくる。

風呂上りは何故か牛乳に限ると思ってしまうのは影響を受けすぎているのかもしれないが、美味いのは間違いないのだ。

共有スペースにはまだ人が居た。この学校の寮には消灯時間がない。さすがに初等部や中等部にはボランティアの人が居たりして消灯時間とかが決められているらしいのだが、高等部には総じてない。自己管理をさせる為なのか知らないが、夜更かしをする奴が増えるだけでは無いだろうか。

そんな事を考えながら、辺りを見渡して座れるスペースを探す。

「ん、空いているな……」

右の壁から2番目の窓に面した席。彼女は足早に席へ向かう。

「……ふう」

席に着いて一息つく。体を伸ばして足を投げ出したように座ると、牛乳瓶の蓋を開ける。蓋は近くのゴミ箱へと。

そして、自然と今日の出来事について考える。

レイヴは白銀聖騎士、ヴェインの弟。ヴェインと兄弟ということは同じく残りの2人とも兄弟だ。

バルトフェルドの名前を持っているのは、白銀聖騎士の中で3人居る。

暗殺、諜報術の達人。プロフェッショナル 第七部隊隊長、ヴェイン・アルシユメッツ・バルトフェルド。

超近接格闘を得意とする天才指揮官。第二部隊隊長、クエイヌ・ケスターテ・バルトフェルド。

超長距離火力支援、ゲリラ戦において右に出るものなし。第八部隊隊長、ジーク・キリディオル・バルトフェルド。

彼らは全員が名の知れた元傭兵。そして、『銀狼』に育てられた戦争孤児である。

ニーナの姉だって、実力では互角なはずだ。まだ帝都の屋敷に居た頃、彼女はそう思っていた時期があった。幾ら『銀狼』の子供でも、そう大差は無いはずだと。

だが、何時見ても姉が彼らに勝つなんて事はなかった。何時も彼らが勝つ。辛勝すらゆるさず、まさに完勝と呼ぶに相応しい勝ち方を。そして彼女の姉は、完敗と呼ぶに相応しい負け方を。

妹として恥ずかしいとも思ったこともあった。同格であるはずの白銀聖騎士が相手だというのに、おかしいのではないだろうか。だが、いつしかニーナは気がついたのだ。

おかしいのは、彼らなのだと。

彼らからは、特にクエイスとサレスからは、戦う時に決まって感じる雰囲気がある。冷たく暗い、陰気な雰囲気。

そして、まるで『碌に本物の戦場に立った事がないような温室育ちの貴様に、私達が負けるとでも思っているのか？』と聞いているような、非難にも似た眼。

それを感じるようになってから、ニーナは確信した。

彼らとは踏んで来た場数が、経験が違う。戦いに関する知識も、感情も、考え方も何もかもが違うのだ。彼らは、常に安全が確保された場所で訓練をしたわけじゃない。『銀狼』から基本を教えられた後は常に本番であり、命を何時落すとも知れない極限状態での“戦闘”しかしてこなかったのだ。武術は忠実に再現するのではなく、^{スキル}発展させ応用し、自分だけの術へと昇華させる。戦いでは、常に必要な動きしかない。いや、もうそういった動きが自然に出来るほどになっているんだろう。

彼ら二人からすれば、一対一の決闘などはお遊びでしかないのかもしれない。

では、彼は？ レイヴはどうだろうか。
陰気か？

（いいや、寧ろヴェイン寄りだろう。ヴェインは多分……）

そこで思い出す。彼の、実に奇妙な戦績。

そういえば、ヴェインだけは何故か白銀聖騎士同士での戦いで引き分け以外になった事がない。八人の誰を相手にしても、引き分けという結果に持っていく。私の姉とも自身の兄とも同じ様に引き分けになる。

（実際、彼の实力はどれほどの……）

その事を考えようとして、本題を思い出す。その新たな考え事を追いつ出すように、少し頭を振る。

そんな事は今は良い。

ヴェインは多分、戦争を肯定も否定もしていないだろう。ただ自分がそこで割り振られた役目を忠実に再現し、完遂するだけ。

きっとあいつだってそうだったんだ。あいつの場合は理由というものだったが……。

ふと、窓の外を見る。とても良い景色がそこには広がっている。

この寮は学校から遠く、少し高い場所にある。この窓から見える景色は結構綺麗だった。

そんな景色を見ながら、また考える。

（あいつは、私が白銀聖騎士になるのを手伝ってくれと言った。それはなぜだ）

友人として？

（まだ会って2日だ。レイヴが誰とでも直ぐに仲良くできる性格という可能性もあるが）

好意から？

（これも違うだろう。あいつの気を引くような行動なんてした事がない。する事もない）

では、何だ？

また頭の中で自問したとき、あの言葉が思い浮かんでしまう。顔

が赤くなるのが分かる。

『僕は君が騎士になるのを隣りで見ていたいんだ』

ああ、本当にもう……。

『隣りで見ていたい』

問題発言だ。

隣りで、という事は、レイヴも白銀聖騎士になるという事だろうか。この国では、そのセリフは生死を共にするという意味に等しい。実際にそうなのだ。

歴代の白銀聖騎士の中にも男女のコンビ、ペアの騎士は何組が居た。なんで何時も2人なのか。そういう質問をされた時、決まって返す言葉が『彼（彼女）が騎士となる姿を隣で共に歩きながら見ていたいからです』とかなのだ。もう騎士にはなっているんだから、1人で良いんじゃないだろうかとか、そういうのは禁句らしい。

そしてさらにそういうのは、決まって後々に結婚やなんやらになって騎士ではなくなっていく。

「ありえんな……」

そうなった自分の姿を一瞬考えて、ため息をついてから呟いた。視線が窓の下の方を見る。

少し向こうの広場にライトアップされた噴水がある。その近くで誰かが1人、型の練習をしているようだった。動きは格闘術のそれだ。

少し向こうといっても、あの広場までここからだとな、300メートルは離れている。おまけに今は夜だ。だがそいつははっきりと見える。ライトの一定の光とは違う、夜の闇を切り裂くような閃光。アレは、放電だ。

そう思った時、彼女の体は動いていた。後には空の瓶とタオルだけが残される。

能力者の運動神経であれば、そんな距離はあっという間だ。彼女

はそのまま寮を飛び出し、全速力で走っていく。
向かうのは、あの噴水の有る広場。

「……………」

着くと、少し離れた所で立ち止まり男を見る。

やはり、レイヴだった。

上は薄手のＴシャツのみになって、下は戦闘科のみに支給される戦闘服だ。他の科でいう、指定ジャージの様なものだ。

放電したまま、背中がぐっしょりと濡れていた。長い間あの状態で維持し続けているんだろう。

何度か前に拳を繰り出し、右足での下段蹴りと上段蹴り。空中に飛び二撃の蹴り。着地と同時に両足をまげ、途中で右足だけを地面と滑らせるように伸ばし回転。そのまま体をそらし、右足を振り上げるように空中で一回転して足をまず地に付けて立ち上がる。

その時、放電が止まる。バチバチと音を立てながら、光が消えていく。

「何か用？」

振り向かないままそう言われた。肩が少しだけ上下している。

その声は、とても真剣さを持っていた。

「ん……いや、窓から見えたんでな。何かと思って見に来てみた」
彼は額の汗を腕で拭くと、踵を返して近くにあるベンチに置かれたタオルを取りに行く。

「そう……寒くない？」

「え？」

そう言われて今の自分の格好を見る。ノースリーブのトップにハーフパンツ。昼ならまだ良いが今は夜。

まあ少々寒い程度なら魔力で身体の活性化をすれば感じなくなる。
「これくらいならな。それよりも、何時から練習していた？」

「寮に帰って直ぐだよ。こういうのは小さい頃からの日課だったからね」

「そうか。……お前、得物は無しか？」

確か、もう一度剣を握ろうと思ったとか、そういう事を言っていたはずだ。

彼は「ああ」と呟きながら苦笑すると、タオルを首に掛けた。

「格闘術は得物を無くしても相手と戦える様に。剣は……今はないから」

そう言いながらベンチに腰掛け、ドリンクを手に取るとそれを口に運ぶ。

「元々調理科だったし」

「上手いのか？」

ふと、ニーナはレイヴに聞いた。

「人並みだよ。人並み」

自嘲ぎみに笑いながら噴水を見る。ニーナもベンチに近づくと、ひじ掛けに腰を置いて噴水を見た。

3段になった白い噴水の塔のてっぺんからは、こんこんと水が汲み上げられ尽きる事を知らない。

しばらく、水の流れる音だけが静かに辺りを包んでいた。

「……そうだ。今度何か作ってみてくれ」

「何かねえ……アップルパイでも作ろうか？」

「いいな。シナモンと木苺を付けてくれ」

レイヴは笑いながら頷いた。

その後、ニーナが彼の練習に付き合い、遅くまで練習は続いた。

十

頼りなく不規則な点滅を続ける街灯。それに手3つ分はありそうな蛾や、見た事の無い虫達が群がっている。

現時刻は深夜2時を少し回った頃。

『こんな時間に、何の用だ』

無関心な声で疑問系の言葉を開口一番に投げかけてくるケスター。ヴェインは学園の並木道にある木の1本によしかかり、その声だけを苦笑しながら聞いていた。彼の片耳にはヘッドセットが付けられている。

「いえね。起きているかなあ？ と、思ってますね」

『……ヘタな冗談はよせ。それと、毎回言っている様に支部の方に通信を入れるな。わざわざ降りる面倒をさせるんじゃない。個人回線があるだろう』

「フフ、まあ良いじゃないですか。可愛い弟が連絡をよこしているんですから」

『さつさと用件を言え。連絡を入れたからには、何かあったんだろう？』

また無関心な声で問う。

（相変わらず、面白みのない人ですね……）

「ええ、もちろんですよ。……この学園にレイヴが入学しました」

『ほう……腕は鈍っていなかっただろうな？』

返答にほんの少し、興味の色がついてくる。彼は左手をコートの内側に入ると、ナイフを一本取り出してそのまま片手だけで弄びながら、「うゝん」と少し困ったような笑顔を浮かべて唸る。

大きな蛾の1匹が、フラフラと街灯から離れる。

「どうでしょうねえ。まあ鈍っているようなら……」

持っていたナイフを突然、数メートル離れた向かいの木に向かって投擲する。ナイフは鋭く宙を切りながら一直線に飛び、街灯から離れた蛾を巻き込んで木の幹に突き刺さる。

狙い通りに的中し、彼は少し口元を緩める。

「死ぬだけです。我々の世界に戻ってくる気なら、ですけどね」
あくまでも笑顔のままそう言い、そしてその表情のままに言葉を繋げる。

「しかし私の弟妹に手を出そうとした瞬間から、そんな輩には死ん

だ方がマシだと思えるほどの絶望と、苦痛と、恐怖。そして、私の知りうるもつとも残虐な方法での死を……誠心誠意、お届けしますかねえ」

『兄姉は対象外か。まあ、貴様に護ってもらうような腑抜けは我々の中には居ないがな』

ケスターの冷たい返答に、さっきから苦笑いばかりのヴェインは木から身を離すと、その並木道に沿って校舎の方へと進んでいく。「それとですね。アリシアさんの妹さんもここに入学しまして。その事についても報告があります」

『ああ、あの家出したとかいう……で、何だ』

彼は報告する。自分が感じ取った、彼女の全てを。その間彼は、自分の心がまだあの感覚を忘れていなかった事を思い出した。どす黒い暗闇。それが心に降りてきた。実に、実に心地よい気分だった。彼にはわかつていたのだ。これから兄がどういう反応をして、どういう事を言ってくるのか。そして自分がする事を。

『……………本当だな？』

最後まで喋り終えた後、彼はそう聞いてきた。

「私が兄さんに嘘の報告をしたことが？」

『していたら貴様はいま私と話していない。……………命令だ。ニーナ・アランドールを見張れ。残念だが彼女は恐らく、これから厄介な事に巻き込まれる。それが何か、分かるだろう？』

ほら、やっぱりこうだった。

その時、彼の心に降りた闇がそこに定着した。

ヴェインは口元を少し上げて微笑し「ええ」と言う。

『これは我々の本来の目的だ。白銀聖騎士としてではない。『銀狼』の息子としての目的、だ』

「分かっています。これはただの私的復讐心」

『そして利己的欲求を満たす為。……………容赦するな』

「ええ、肉片の一片に至るまで残させません。全てを奪ってみせましょう」

それで通信を切り、ヘッドセットを外すとコートのポケットに滑り込ませ、顔を月に向ける。

綺麗な月だ。月は好きだ。太陽は明る過ぎる。

彼は笑顔だった。兄弟にすら殆ど見せたことの無い、彼の本質的な狂気の喜びに満ちた笑顔。閉じられたように見える目も今は開かれ、見事な鮮血の虹彩が月光の元で露になっている。

ああ、待ちわびた日々が来ようとしている。

「今日はいい夢を見れそうだ。………実に」

誰にともなくそう呟きながらゆっくりと歩き出し、口元が不自然に引きつった笑顔を湛えながら、彼は常闇の中に消えて行った。

第4話 我が技 1

「はい皆さん。今日は皆さんの実力を測らせていただきます」

ヴェインが生徒達の前に立ち、高らかに宣言する。彼の姿を前にした生徒は、当然の事ながらざわついている。だが、今回でも気が付いたのは数人だ。首都で行われる式典や、不定期の催しにでも行かない限り、白銀聖騎士なんて普通は素顔を拝めるものじゃない。

ここは戦闘科闘技場第1控え室。クラス単位で入る事を想定しているので、結構な広さがある。

「で、ですね。実力を測るのには手っ取り早く魔獣と実践していただきます」

さらっと言ったが、結構問題発言だ。

レイヴは肩を落してうつむき、右手を顔にあてて嘆いている。二人は、他の生徒と同様に啞然としている。いきなり基礎訓練も知識も無しで魔獣と戦え、なんていうのは、死ぬと言われている様なものに等しい。一瞬立ちくらみの感覚に襲われるレイヴ。

「せ、先生……魔獣って危なくないですか？」

生徒の1人が恐る恐る手を上げて発言した。

しかし、ヴェインは。

「ええ、もし大怪我になりそうなら私が止めますのでご安心を」
嘘だ。

これはアレだ。お父さんが自転車の補助輪を外して練習する子供に向かって言う言葉と一緒に。違うのは、怪我をしたって彼の場合は微笑したまま眺めてるだけという点だが。

しかし、そんな人だとは露知らず、他の生徒は半分以上が安堵の顔をみせている。

「それでは4人班を作ってください。その後くじ引きで順番を決めますので」

複数人でやるという事にさらに安心感を得たのか、安堵の聲がさ

らに広がった。

「おい、お前の兄はメチャクチャだな」

ニーナが耳元で小さく言ってきた。彼は申し訳ないとばかりに肩を落す。

彼はいい。アレが昔のからやり方だったし、サシで戦うよりははるかにマシなのだ。

辺りを見渡せば、それでも9割に余裕は見られない。

2人の女子生徒がレイヴとニーナに近づいてくるのが分かった。

1人は長身のショートカットでカッコいいといった感じ、もう1人は小柄でサイドポニーの可愛いといった感じのする対照的なコンビだ。

「やや、レイヴ君にニーナちゃん！ お2人は組むのかな？ やっぱり余裕かな？」

小柄な方の生徒が、ニパツと笑いながら下から覗き込むように言ってきた。どうやら、ハイジャックの一件を知っているらしい。

「え？ うーんと……」

「まず自己紹介しろよ。2人とも困ってるじゃないか」

組む事になってたかどうか分からずニーナに視線を送っていると、今度は長身の方が小柄な方の襟首を掴んで引き戻しながら言った。

「私はリン・リンメイだ。で、こっちがシャルロット・エバンス」

「ども」と笑いながら手を振るシャルロット。レイヴ達も自己紹介をして返す。ちなみに、ヴェインが兄であることは秘密である。「もしよかったら私達と組まないか？」

「私は良いが、レイヴは？」

3人の視線が自分に集まる。彼は軽く頷き、リンがくじを引きに行くといってヴェインの居る壁際まで走っていった。

くじの結果は最後だった。2クラス合同で20組中20番。

何と無く。何と無くだが、レイヴは仕組まれた気がしてならなかった。

「さ、とうとう次だぞ。全員防具のチェックはしたな？」

ニーナが自分たち以外誰も居なくなつた控え室の選手用通路のドアの前で、腰に両手を付けて仁王立ちになつて言つた。

2人は張り切つた様子でニーナを見つめて頷くが、レイヴは心配で落ち着かない様だ。

問題はあの人は何を用意したかだ。低級といつても危険じゃない訳では無いし、対処を間違えれば死ぬ。

『では、20番目のチーム。入ってください』

ドアの上に設置されたスピーカーからヴェインの声が室内に響く。事務的にも聞こえるが、ニッコリとした様子で喋っているのはありありと想像できる。

「よし。行くぞ」

その言葉で踵を返し、ドアを開けて歩いていくニーナ。それに続くようにシャルロットとリンもドアの向こう側に行ってしまう。その彼女らの背中を見ながら、使い込まれ傷の入つた愛用の指貫のグローブをはめると、レイヴもドアへと入っていく。

廊下の天壤に等間隔に並べられた薄明るい蛍光灯。それを20メートルも行くと、闘技場への選手入場口に突き当たる。そこには、見張りの教員が立っていた。確か……ナトヤ先生だ。

「先生、20班です」

「ん……よし、全員だな。行つて良いぞ」

名簿と人数を確認してからドアを開ける。分厚い防御壁の様な扉がゆっくりと横にスライドして日の光を中に流し込み、楕円形の闘技場が眼前に広がる。縦幅が400メートルで横幅は200メートルらしく、集団戦の訓練もできるようになっている。これがあと4つと、これよりも更に大きい物もあるというのだから驚きだ。

初めて闘技場に入った。周りには高い壁とその上に設けられた観客席があるのだが、反対側の壁は見る事が出来ない。見えない距

離ではないのだが、木が邪魔で見えないのだ。

この闘技場は森林での戦闘を想定しているらしい。

『では、魔獣を放します。魔獣が何なのかは自らの目で確かめてください。数も自分たちで』

複数の方向から扉の開く音が聞こえる。その時。

「オーーーーーン」

「オooooooooーン」

魔獣の鳴き声が聞こえる。狼の様な遠吠え。同種が2体以上。恐らく共同での狩りを行う。彼にはその情報だけでも、相手の能力が予想出来た。

「二手に分かれようか。僕とリン。ニーナとシャルロットで」

「分かった」

「了解した」

2人が返答して、シャルロットがコクコクと頷いた。各々が魔方阵を展開して武器を取り出す。そして、左右に分かれるように走り出した。

能力的には間違っていないはずだ。控え室に居る時、4人でそれぞれの武器や得意な戦法を教えあっていた。

レイヴは近接戦闘の拳。ニーナは距離としては万能のガンソード。リンは中近距離の薙刀。シャルロットは遠距離の魔法。レイヴがシャルロットと組むと、フォローに回れないかもしれないかもしれない。なかった。

「ウォーン」

「ウooooooooーン」

短い遠吠え。

恐らくはどちらがどちらを狙うか決めたんだろう。気配の1つがこちらに向かってくるのが分かった。

左足裏を地面に滑らせ減速し、気配の方向を向く。深く息を吐き、一気に吸う。

雷系魔法、雷鎧。

彼の体の中で練り上げられた魔力が、雷電となって体から放電さ

れはじめる。

放出系と言われる派手なものとは違い、体内強化系魔法といわれる物の1つ、『雷鎧』。瞬間的な身体能力を飛躍的に上げ、雷系統では珍しく持続効果がある高等な技術を要する魔法である。

その神々しく荘厳な雰囲気、レイヴを包んでいた。触れれば怪我ではすまないと分かっているとは思わず触れたくなるような輝きを放っている。

伸ばした腕を引っ込めながらリンは思っていた。自分と同年代のはずの彼が、どうしてこんな力を持っているのか。そして、何故この学校に来たのだろうか。

「来るよ」

そうレイヴが言ったのとほぼ同時に、斜め上から何かが飛び込んできく。

レイヴは上へ高く回避。リンは後ろへ跳躍して回避し、それで距離をとると同時に薙刀を水平に振り一撃を加えようとする。だが…

…。

「なっ!?!」

魔獣は、薙刀の刃をその鋭い牙で銜えて受け止めて見せると、首を横に振ってリンを投げ飛ばした。

木の幹に背中から叩きつけられ、近くの地面に途中で手放してしまった薙刀が突き刺さる。息が数瞬止まりかけた。

「ぐ……なんであんなのが……」

リンが魔獣を睨みつける。魔獣はその鋭い目に捕食者としての絶対的自信を宿し、地を風のように駆ける事の出来る4本の足で、段々とリンとの距離を詰めていく。

彼女は薙刀を杖の様にして立ち上がり、魔獣を再度確認する。

狼の容姿だ。口元からは鋭利で強靱な牙。人間の肉なんか簡単に引き裂いてしまえそうな爪。細く、無駄な贅肉など付いていない脚。倒せそうにないが、やるしかない。

彼女は薙刀を構えなおし、体勢をつくろうとした。

らいがいけんぎ　せんらい
雷鎧拳技・尖雷

声が聞こえた。魔獣が上を向く。頭上からレイヴが拳を腰の位置で構え、左肘を突き出しその手で顔の半分を覆うように広げながら飛び込んでくる。

拳に電気を収束させ、殴りつけると同時に相手の体内へと大量の電撃を放出する技だ。

閃光がガルムへと落ち、ズドンッという衝撃音、雷鳴と共に煙幕が辺りを包む。次瞬、影が1つ飛び出した。

「グルルルウウ」

体の左半身を黒く焦がしたガルムが唸りながら煙幕の中を睨みつけている。リンが半身の構えを取ると、それに気が付いたのか視線が此方へ移動した。

来るなら来い。

彼女が覚悟を決めたと同時に、魔獣が疾走する。

らいがいきやくぎ　じんらい
雷鎧脚技・迅雷

煙幕から雷が飛び出し、リンに喰らい付こうと走る魔獣の横っ腹に突き刺さるようにして直撃する。

いや、雷ではない。

蹴りだ。レイヴの蹴りが直撃していた。

吹き飛ばされ、リンの様に木の幹に叩きつけられる。情けない鳴き声を出して地に落ち、フラフラと立ち上がるうとする。

「させるかあっ！」

リンがすかさず駆け、魔獣に斬りかかる。

斬撃。

魔獣は腹部を切り裂かれ、腸をぶちまけて絶命した。
はらわた

「ふう……やったな。……おい？」

リンは怪訝顔でレイヴを見る。

随分と鈍ったな。と、彼は魔獣を蹴り飛ばした場所に立ち、自分の掌の一点を見つめて考えていた。

あの頃なら、こんな魔獣如き『迅雷』が入った時点で決着が付い

ていたはずだ。それどころか、一撃目を外すなんて事も無かっただろう。だが、強くなりたいといった願望も今の自分には無い。だからこれは、それに対しての感情ではないはずだ。

では、今とてもイラついたのは何故だ？

(……ああそうか)

父から教わった技を“忘れかけていたから”だ。それに気がついて、そんな自分自身がとても情けなく、嫌悪感さえ抱く程にまでイラつきが増す。

もう一度。もう一度戦わせて欲しい。

昔の感覚でやってはいけない。むしろその感覚を思い出すように、じっくりと締め上げよう。

その時、ニーナ達の向かった方向からの遠吠えが耳に届いた。彼は掌を見つめたまま、暗い笑みを浮かべる。開いた手を握り、踵を返してその方向へと進む。

丁度良いじゃないか。

彼自身、今になって自分がここまで戦いたいと思うとはと、内心驚いていた。

+

一方、レイヴらと別れた直後のニーナ達は、直ぐに魔獣と遭遇していたのだが、彼女らはまだその姿を捉えられないで居た。

「ちつ……シャルロット、援護を！」

微かに感じ取れる気配と残像を頼りに、弾丸を撃ちまくるニーナだが当たっては居ない。それに前に出すぎた。一旦戻って体勢を立て直そうと考えた。

向こうも余裕綽々と、此方を狩るタイミングを見計らっているようだ。

炎系魔法、炎矢・15連射。

シャルロットの掲げた杖が光り、彼女の前に炎で作られた矢が出

現する。「行け！」とシャルロットが叫ぶと、矢が四方八方に飛んでいく。

ニーナが彼女の前に着地したとほぼ同時に、着弾しその一帯を炎上させる。濛々とした黒煙が立ち上り、彼女たちは炎の輪の中に閉じ込められる形になった。これは援護なのだろうか。

「……」

ニーナは前を向いて迎撃の姿勢をとったまま、彼女の方を向こうともしない。それどころか、次第に肩がワナワナと震え出しているではないか。

「……テヘッ」

はにかみながら舌をピツと出して見せるシャルロット。その頭に、ニーナのガンソードの峰の部分が叩きつけられる。

「タァ……結構イッタァ」

眼を丸くして所業を主を見る。

「何がテヘッだ！ これじゃ動きにくいだろう！？」

「動きにくいじゃなくて、動けないんです」

「バカか！」

ニーナが頭を抱える。

だがまあ仕方が無いと、彼女の頭の中ではすでにこの状態から有利になる方法を編み出そうとしていた。

炎のおかげで此方に向こうもそう易々とは近づけないだろうし、時間が稼げたといえれば稼げた。此方が何とかして向こうに行けば、不意をつける可能性も無きにしも非ずといった所だ。

まあ、どうやって向こうに行くかが問題だが……

「風の魔法は不得意なものでしてー」

風の魔法があればスピードをつけて跳躍できると聞いてみたが、どうにも緊張感の無い声で、片手で頭の後ろを掻きながら言われる。

確かに自分だけで超える事も出来る高さだ。強行突破でも行こうと思えば行ける。が、なるべく高い位置に一回出てから相手の位置

を確認して着地したいのだ。普通に跳ぶにしても、着地した瞬間に敵の目の前というのはこつちが不利になる可能性がある。」

「得意なのは？」

「基本の炎と水位だね。独学だとこれ以上は難しいし」

「水柱は出せるか？」

それで打ち上げてもらえば高く跳躍できる。出来なくても最悪、炎を水で消して飛び出そう。無理に奇策を考えたりする必要もない。そう思い直す。

「出せるんだけど……残念だけどそんなに高くは出せない」

「ああ、高さは良いんだが」

「てか、ニーナちゃんの魔法は？」

「む……いや、その、魔法はだな……」

ゴニョゴニョと口ごもってしまふニーナ。シャルロットはそんな彼女の顔に怪訝顔を向ける。

その時、魔獣の咆哮が木霊する。

第5話 我が技 2

「レイヴ！」

後ろからリンの声が追ってくる。彼は振り返ることなく走っていた。その眼には前しか見えていない。

まだ魔獣が残っている。自分の感覚を取り戻すのに、丁度良い材料が。

右手の一角が燃えている。そしてその周りを歩いている魔獣が眼に入った。右腕の放電だけが強まり、それと同時に加速する。その途端に、彼は左足を前に出して急ブレーキをかけた。そのまま掌底を突き出すように右腕を魔獣へと向ける。

雷系魔法、りゅうつかくかいけき龍殻壊撃・ほうでん咆電。

腕に纏っていた電気が、一気に掌の魔方陣から撃ち出され、一閃の雷が魔獣目掛けて直進する。魔獣はまだ、炎の中を注視していて気がついていない。

直撃。後ろから突き飛ばされる様に宙を舞い、地に叩きつけられる魔獣。

「リン、突撃を」

「わ、分かった！」

レイヴの脇を通り過ぎ、魔獣へ切り込んでいくリン。レイヴは左足に力を籠めて、前方へ大きく跳躍すると、リンを遥かに飛び越え、右足だけを伸ばした状態で空中で縦に一回転する。

魔獣が体勢を立て直そうと立ち上った。レイヴの口元が少し彎りあがる。

（そうだ。まだ死んでくれるな）

らいがいきやくぎ雷鎧脚技・らいきやくてん雷脚転。

稲妻の尾を引きながら、レイヴの踵が魔獣をもう一度地面に叩き付けんと落下する。

ズドンツと地を打つ音だけが聞こえ、彼の踵は魔獣のいた地面を

半球状に窪ませた。小さく舌打ちをする。

「はあああつ！」

リンが少し離れた場所で切り込んでいる。

向こうに逃げたか。彼は身を起こし、また走り出した。

（情けない。その一言に尽きる。いや、元々得物が無いとこんなモノだったのでしょうか。まあ、どちらにせよ情けない）

ヴェインは開かれたファイルを組んだ足の上に置き、観客席から戦いの様子を眺めていた。

「ふうむ……」

「いやはや、素晴らしいですね。20班は」

左後ろから声が聞こえる。同じ戦闘科のナトヤ先生だ。彼は観客席の階段を下りてくる。

ヴェインは振り返ることなく返答した。

「そう……ですね」

「？ 何か不満が？ これ以上無いぐらいに優秀な生徒じゃ有りませんか。特に『雷鎧』を使う男子。確か……レイヴ・ルフオシユタインでしたか」

ヴェインは苦笑してみせる。

そう。この学園では。この学園ではこれ以上無い程に優秀だろう。何せ彼の弟だ。

（だが……）

彼はニツコリとして閉じられた様な眼を細く開き、レイヴの居る場所を見る。視認は出来ない。木が生い茂っていて、その姿はチラチラと見えるだけだ。だが、それだけでも分かる。

弱すぎる。戦い方を忘れている。まだ此方に戻る事をどこか躊躇している。彼はそう感じた。剣を握る理由が出来た、と言ったか。あれではあの頃から成長していないどころか、墮落している。そし

て、“ただ父への憧れ”というそれだけの理由の為に、また剣を握ろうとしている。

憧れというのは脆く、簡単に崩れ去る。憧れているものが汚れたり、無くなってしまうは一瞬だ。そんな不安定なモノだけで剣を握って良いのは最初だけ。そんな事なら剣なんか握らせるわけには行かない。武器はしばらく返さないほうが良いのではないだろうか。

（むしろ、アレは返した方が良いかもしれませんが……）

次にニーナの居る場所を見る。炎が円状に広がっているが、やはり木が邪魔で中までは見えない。

（……おや？）

「居ない？」

「は？」

「ああ、いえ」

ニーナとシャルロッテの気配が無い。飛び越えていた？　いつだろうか。

「今の内に魔獣の背後に回り込む」

「うん……それにしてもさ」

「なんだ？」

「いや、なんか無駄な時間過ごした感じがして」

「原因は誰のせいだ？　誰の」

「さあ？」と首をかしげるシャルロットに呆れながら、走る事だけに集中する。

まあ、私の判断が遅かったのも原因の1つか……。

「ん……気配が近いな。用意しろ」

言いながら、ガンソードのグリップを握りなおす。

魔獣の尻尾が見えた。剣銃を前に構え、引き金を交互に連続して引く。魔弾が打ち出され、魔獣に殺到する。

炎系魔法、炎矢・10連射。

シャルロットの魔方阵から矢が現れ、火の粉を尾にして魔獣へと放たれていく。

魔獣はその研ぎ澄まされた感覚で跳躍し、それら全てをかわしてみせた。

だがニーナにはそれも計算済みだ。彼女はもうすでに魔獣の頭上に移動して腕を振り上げている。

「はぁあっ！」

彼女は腕を振り下ろし、剣銃で切りつけた。が、その切先は魔獣の肉を浅く裂き、濁った血が少しばかり飛び散る程度に留まった。着地しながら、すかさず照準を魔獣へと合わせようと腕を上げて銃口を向けるが、なかなかあわせられない。魔獣の速さに追いつけないのだ。

くそう。

心の中で悪態をついた直後。

雷鎧拳技・雷牙^{らいが}。

「レイヴ！」

一筋の閃光が魔獣に喰^くらい付く。

ニーナはその閃光の中に、魔獣の横っ腹を鷲掴みしているレイヴの姿を見た。

「そのまま逃がすな!？」

彼女はガンソードを構え、引き金を引いた。

十

「皆さん良く頑張りました。まあ若干数名の方が保健室に運ばれましたが、まずまずです」

随分と授業開始当初よりもガランとした第一控え室で、ウェインはそういった。

送られたのは若干数名ではなく、一クラス分以上。そして、運ば

れたのは保健室ではなく病院である。

まさかここまで被害が出て、本当にギリギリまで止めに入らなかったとは……と、レイヴの中ではまた兄の株が下がる。そして彼自身、感覚を取り戻す前に止めを刺されてしまったことに不満だった。いや、止めを刺してしまったニーナに対しての不満というよりは、ただ単に感覚を取り戻しきれなかった事への不満なのだが。

「兄さん、剣を……僕の剣を返してください」

放課後、騎士団の支部にあるヴェインの執務室にレイヴは居た。

コート掛けにはヴェインのコートが下げられ、その横にある二つの本棚の内、一つは怪しげな瓶で埋め尽くされている。

ヴェインは、忙しく書類にサインや必要事項を記入していたその手をピタリと止めると、視線を書類からレイヴへゆっくりと動かしていく。その目はやはりニッコリと閉じられたままで、口元もやはり微笑していた。だが、次に彼は左に首を傾けた。

左に、傾けたのだ。

笑っていない笑顔。

であれば、次に返ってくる返事は、もちろん……

「ダメですよ？ 今日のあの戦い方ではとてもとても……フツ、返せたものではないです。どうせ剣を握りなおす理由も、父さんへの憧れでしょう？」

そう言つて、また書類に目を落として筆を走らせる。

しかしレイヴは黙っていられたなかった。

「それが僕のもともとの理由だった！ 父は僕にとって、兄弟にとつて憧れだったじゃないですか！ それが理由で何がいけないんです！？ 昔の感覚を完全に取り戻すためには――

シュツと空を切る音。

レイヴは言葉をとぎり、つばを飲み、焦点の定まらない目を下に向ける。

自分の顎の下を、冷たい感触がチクリと突いた。皮膚が薄っすらと切れ血が滲み出る。血は伝い、ヴェインの左拳の甲に落ちていく。

手首に仕掛けられた、魔力を送り込む事で飛び出すナイフが伸びていた。他にも彼の手首、肘、膝には、同じ様に付けられている

30センチほどで、短刀とも言える　ナイフが見える。

見えなかった。出す瞬間が、手の動きが、彼が立ち上がったいたのも、何も見えなかった。

「ほら、弱くなっている。昔のあなたなら、十分にかわせた筈です。これは剣を返す以前の問題ですね。違いますか？」

何も言い返せない。

事実だ。

ヴェインが腕を引きナイフを元の位置に戻していく間、彼はうつむき歯を食いしばっていた。

そんな様子を見てか、ため息が頭の上でおこった。

「まあ剣は当分返しません、これをつけていなさい」

レイヴは顔を上げて、ヴェインが摘んでいる物に向けた。

彼は十字架のイヤリングを一組、持っていた。

銀製で、表面にはうつすらと文字が彫られている。

自分自身の魔力を抑え切れない人が使う、銀装と言われる装飾品だ。

古代より銀には魔を封じる力があるとされ、それに魔力封印の術式を埋め込んだ物なのだが、これは通常よりも強力に魔を封じる術式を掛けられた物らしい。超上級の能力者、特に白銀聖騎士や大魔導師がつけるようなレベルの術式が埋め込まれている。

ヴェインが持つそれには見覚えがあった。

そうだ。剣を離すならば、はじめとして彼が兄に渡したものだ。

普通に生きるだけなら、ここまで強力な物は必要がなかったし、付けていては見ただけで上位の能力者だと分かってしまう。だから渡したんだが……

「片方は貴方が付けてください。もう片方は、ニーナさん」

彼はレイヴの手を取り、掌の上にイヤリングを置くと、ペンをくるくると回しながら座りなおした。

「え。な、何で？」

「片方だけでも、魔力のコントロールくらいある程度出来るようになっていたでしょう？ やり方も私が教えた筈ですが……まさか、それすら出来なくなっただので？」

違う。そうではない。

彼が聞きたいのは、何故ニーナが銀装をつける必要があるのかという事だ。確かに一般人から見れば、あの年齢であの魔力の量に達しているのは異状ともとれるだろう。ありえないほどに膨大だったし、あの量は潜在能力に他ならないだろう。訓練すれば白銀聖騎士をも凌駕する量を操れるようになるかもしれない。

だが、レイヴやヴェインの様な本当に強いとされる者から見ればまだ成長途中であり、ここまでの銀装をつける程でも無い様に思えるのだ。

「それを知る必要はありません。今はね。武器の返還の件は……まあそれからです」

「……でも」

「言うておきますが、本当にこっち側に戻るつもりなら貴方の理由では不十分です。兄として忠告しましょう。考え直さない。憧れは脆いのです」

「くっ……」

ヴェインは書類に目を通し、ただ微笑しながら言った。

十

数日前、ヴァルエランス領のグアンバルテ山脈。

ヴァルエランス皇国中央と東とを分断するように伸びるこの大山脈は、低級の魔獣たちが住み着き、比較的な安全地帯であった。

そう、過去形である。

「く、来るな！ ひっ……ウギヤアッ！」

ベシヤツと、地面に倒れる兵士。その腹は見るも無残に抉られ、

骨は砕かれている。腸がドロドロと流れ出て、赤い水溜りが出来上がる。そんな水溜りが、あちこちに見えていた。皆、商隊とそれを護衛していた兵士だ。

無残なキャラバンの周りには、2メートルはあろうかという体軀をした魔獣たちがたむろしていた。

「グオオオオオツ！！！」

1匹が夜空を見上げ、木々を揺らめかすほどに吼えると、それは連鎖していくように次々と歪な叫びをあたりから生んでいく。

そこへ降り立つ1人の小柄な少女。暗い中でも、ひときわ輝きを放つ指輪の銀装を身につけ、袖が異様に広がった白い服に白いスカート。

その少女に気がついた魔獣たちは、一斉にそちらを見る。紅くぎらついた、本能でしか動いていない目。鮮血の目。

（いやな目だ）

そう思いながら、垂れた右腕を前に出し、魔方陣を展開。

それとほぼ同時に、魔獣たちは獠猛な牙と爪をむき出しにして、彼女に向けて走り出した。しかし、次に響いたのは彼女の絶叫ではなく、魔獣たちが惨たらしく貫かれ叫ぶ声だった。

彼女の袖からは無数に、鉄製の茨の様な物が飛び出していた。それは尽きる事無く伸び続け、曲がりくねり、先端に付いた蕾状のスパイクを魔獣たちに突き立てる。最後の1匹に蕾が刺さり、辺りには魔獣の串刺しが出来上がった。

「グ、ゲガガ……」

だが流石は魔獣と言った所か。まだ息が有る。生命力だけならば、ゴキブリ以上かもしれない。

彼女は右腕をゆっくりと反し、掌を上にした。すると蕾が広がっていき、花びらの先から鋭く長い刺を勢い良く伸ばした。その途端ブシュッ

血飛沫を巻き上げて、魔獣たちの体の中からも針が現れた。鉄製の茨の棘が伸びたのだ。

シウルシウルと、刺を縮ませて袖の中に消えていく茨。彼女はそれが終わるまでの間、ただジッと、骸^{むくろ}を見ていた。

「ニキイ、そっちも片付いた？ 怪我、してない？」

不意に後ろから声をかけられる。その声の方をむけば、背の高いスレンダーな女性がこっちに駆け寄ってくるのが見えた。丁寧に梳かれたショートカットの髪に彼女もまた、ヘアピンタイプの銀装を着けていた。

「大丈夫、エレナ姉さん。幸い大群と言っても、ここから出たのは魔獣の中でも低級だったし」

「そう？ ならいいのだけど……」

「うん。でも、なんでこのグアンバルテで魔獣が人を……こんなの今までになかったよね」

「……そうね。でも、今はそんなことは良いわ。私たちは兄さんの所へ行かないと……」

「分かってる。でも、もう少しかかりそうだね」

ニキイはあたりを見渡しながら呟いた。道の脇にある草木が微かにざわめき、不気味なうなり声と視線を飛ばしている。紅く、獰猛な目だ。

「ええ、もう少しね」

エレナがそう呟き、2人はまた闇の中に消えた。

第5話 我が技 2（後書き）

今回からPCが壊れたため、PS3で投稿します。

そのため、1話ずつが短くなることが予想されますがご了承ください。長いのは、1、2などで分けるつもりです

第6話 ギルド解禁（前書き）

誤字脱字・文法ミスは、しばらくの間直すことが困難になります。
ご了承ください。

第6話 ギルド解禁

エレナとニキイをそちらへ送る。ディアナの了承は得た。男でも良かったのだが、対象が女ということを考慮して戦乙女旅団ヴァルキューリアの中からその2人を抜粋した次第だ。

実力についてはお前も知っての通り、戦乙女旅団の中でもトップクラスだ。

二人は護衛が任務だとは知らない。何とか、彼女との友好的な関係を築かせろ。

そちらへ送った理由は、エレナがお前の秘書として。ニキイは私が進学を薦めた形になっている。

この件で手を汚すのは我々男だけで十分だ。気取られることは許さない。

クエイス・ケスター・バルトフェルドより
親愛なる我が弟、ヴェイン・アルシュメッツ・バルトフェルドへ

「……兄さんからの手紙が、今朝届いた訳ですが……」

内容を思い出しつつ、デスクの端に置かれた手紙と、前に立っている2人の女性との間で目線を行き来させているヴェイン。

彼の目の前には、セミロングの小柄で活発そうな少女。その左には、艶やかな黒髪のショートカットの長身女性。

名は順に、ニキイ・ロゼ・バルトフェルドと、エレナ・フィリス・バルトフェルド。どちらも『銀狼』の子供である。

「突然ですね。何の連絡も受けてないに等しいほどに」
「そうみたいね」

エレナの少し苦笑気味の顔の前で、ヴェインは両肘をついて手を組みその上に顎をのせる。

「ふうむ、まあニキイはなるべく早く学校へ通えるように手配しましょう。エレナも明日から仕事を手伝ってください。手続きについ

ては私が何とかするとして……」

「そういえば、レイヴは？」

ニキイが思い出したように口走った。ヴェインは気まずそうに、あからさまに視線をずらすと遠くを見たような目になる。

「まさか、知らせてないの？」

レイヴにはまだ二人が来ることを知らせていない。別に知らせてくはないわけではないのだが、知らせるタイミングが無かったのだ。明日ニキイから直に伝えさせるか。

（あ、ダメですね。明日は休日だ。……ん？ 何か配布するものがあつた気がするのですが……何だったか）

「うーん？ なんてしたっけ……」

「兄さん？ 聞いているの！？」

+

日曜日。

「ギルドライセンス？」

ニーナは、リン、シャルロットと共に、昼食を食べていた。そんな中話題に上がったのは、金曜の放課後から新入生のギルド使用が解禁になった話だった。

「そう。おとといからね」

ピット、スパゲッティを巻いたフォークを突き出したシャルロット。

「知つての通り、どんなギルドにもライセンスが存在する。とくに能力者ギルドは、戦闘科としては入っておきたいよな」

「でも多分、もうほとんど良いの残って無いよね」

そう、能力者ギルドの試験は激戦だ。依頼には限りがあるのだから。

リンとシャルロットはため息混じりに頷きあうが、そこまで落胆した様子でもなく食事の手は休んでいない。

しかし、ニーナは違う。顔には脂汗が滲んで、明らかに焦っている。

「……先生、そんな事言っていたか？」

「いいや？ 掲示板で知った」

「先生、プリント配布忘れたっばいよね」

突然、バツと椅子をはね飛ばし立ち上がると、ニーナはレストランから風のように出ていった。シャルロットとリンは眼をまるくして彼女が走り去って行く光景を見ていた。

ニーナにとっては冗談ではない話だった。白銀聖騎士になるためなら、能力者ギルドに入っているなんて当然のこと。出来ることなら直ぐにでも入りたかったのだから。

「支部長、Aランクの依頼書、見かけませんでした？」

腰に剣をぶら下げた軽装の男が、カウンター越しで昼食のクロワッサンをパクついていたガタイの良い男を呼んだ。

支部長と呼ばれた男は「ああ？」と小首を傾げ、無いと思いつつも一応辺りの書類を確認しはじめる。彼の左胸には、能力者ギルドの紋章。剣をくわえた獅子が描かれていた。

「ねえな。どうかしたのか？」

ドアの開く金属音。

一瞥だけして直ぐに視線を軽装の男に戻しながら、カウンターの手前におかれた山盛りのクロワッサンを一つ摘み、一口でパクリ。

「いえね。Aランクのが一枚足りないようで……」

軽装の男は、支部長の行動を気にしない様子で返答しながら、横目で入ってきた少女を見る。高等部の新入生らしき彼女は、ギルドが用意した試験依頼の掲示板の前で、膝を押さえて息を切らせながら俯いている。相当走ってきたのだろう。

「何の依頼だ？」

「ホラ、ちょっと前に来た、あのAにしては妙な内容の依頼ですよ」
「……………ああ、あれか」

支部長の男は、記憶していた依頼の中から一つを引っ張りだしてくる。

Aにしては簡単すぎる内容。明らかにDかそれ以下の内容だった。グアンバルテ山脈の麓に位置する村からの依頼で、危険な魔獣もそんなにはいない。こちらから手を出さなければ比較的温厚なのだ。

「結局、あれは間違いないのか……………まあいい。よく探せ。間違っても、下位ランクの能力者に受理するなよ」

緊急依頼として出てきたので、規定通りにやむを得なくAランクとしたが、緊急性も感じられない。もしかしたら緊急だけでDなのかもしれないが……………

そう思いつつ、クロワツサンに手を伸ばそうとしたところで

「これ！ これを頼む！」

クロワツサンと自分の手の間に依頼書が差し出された。顔を上げてみれば、さっき入ってきた子だ。金髪のショートカットで意志の強そうな眼をしている、気品のある娘だった。

支部長の男は胸ポケットからペンを取り出すと、受け取った書類欄に「ウィレム・バード」とサインを入れ、少女に返す。

「試験の重要事項にも書いてあるが、必ず二人以上で行け。都市を出る際に門番にこの書類を見せれば通してもらえるから……………って、聞けよ」

それを言い終わるか終わらないかのうちに、少女は駆けていってしまった。

「がんばれよう」

小さくそう言いながら、クロワツサンを頼張るウィレム。軽装の男も微笑ましく、彼女が駆けていく後ろ姿を見ていたが……………

「……………あれ？ 今週分の試験依頼ってまだ残ってましたっけ？」

「くっ……リンとシャルロットはどこだ？」

さっきのレストランに戻ったは良いものの、誘おうとした二人が居ない。

二人以上で行けと言われた。さて、どうしたものかと、レストランの前の道に仁王立ちになって考える。

「あれ？ どうしたの？」

聞き覚えのある声が聞こえ、声のした方を向く。

そこにはやっぱり見覚えのある顔があった。

「レイヴ！ ちょうど良いところに来た！」

「あ、もしかしてこのお店に来てた？ どう？ 美味しかった？」

「え、あ、ああ」

確かに美味かったんだと思う。あの後の話が記憶に鮮明すぎるせいか、いまいち思い出せないが。

「それより、話があるんだが」

「いやあ、やっぱり料理はいいね。昨日ね、ここのお店で料理経験のある人募集ってなってたから面接受けたんだけど、即採用されちゃったよ。今日も今まで調理場でね」

「ん、では、さっきのはおまえの作ったのだったのか……あ、いや、そんなのは今はどうでも良い！ 話を聞け！」

楽しそうに料理について語るレイヴの顔面に、書類を突きつけるようにして差し出すと、今回の経緯を話し始めた。

「成る程、ギルドライセンス……」

「そうだ。シャルロット達を誘おうとしたんだが、見あたらなくてな」

「それで、一緒に来い、と……」

「そういうことだ。どうだ？」

終始神妙顔で聞いていたレイヴは、「うん」と苦笑気味に唸りながら頬を人差し指でかく。

「出来れば行きたいんだけどなあ」

「何だ？ 先約でもいるのか？」

「いや、そうじゃないんだけど……」

「では、バイトか？」

レイヴは首を横に振り、何かを言いかけろが、直ぐに口を閉ざしてしまふ。それをジツと、何も言わずに睨み続けるニーナ。次第に、彼の顔がニーナから背けられていく。

「何か……隠してるな？」

「え？ あ……その」

ジトーツとした視線が、レイヴの左頬に突き刺さる。

辺りはまだ昼。しかも人通りも多く、様々なお店の建ち並ぶここでは、彼ら二人の姿はまるで、何かを問いつめる彼女と、弁解しようとするが言葉の見つかからない彼氏のような。まあしかし、そんな風に見られている等と、二人は想像すら出来ないのだろうが。

「……分かったよ。話す。話すから睨まないで」

やはりというか、先に折れたのはレイヴであった。ニーナは「よし」と、腕を組んでまた仁王立ちになる。

「実はね。持ってるんだ」

「何？」

「だから、持ってるんだよ。ライセンス」

「なっ！？ 何故誘わなかった！」

「さ、誘うも何も、ライセンスをとったのはもう十年以上も前で……」

思わず身を乗り出し、襟首をひつつかむニーナに、レイヴは反るような体制になりながら苦笑して弁明する。

「く……二人を探すしかないか」

「お困りのようですね」

また見知った声が、今度は真横から聞こえてくる。振り向けば、ヴェインがメートルもない距離に立っていた。

思わず素っ頓狂な声を出してしまうニーナ。

「そんなに驚かなくても……先生ショックですよ」

「す、すみません……」

「いきなり出てくる兄さんにも問題がありますよ」

馴れているのか、全く動じていないレイヴ。

「癖ですからねえ……ああ、そういえば、ギルドが解禁したというプリントを配布するのを忘れていたんですよ。申し訳な……ん？もしかして、試験を受けるので？」

ヴェインはニーナの手に握られた依頼書を見つけるやいなや、パツとそれを奪い取り、内容を流し読んだ。

リオラという村からの依頼。

村から山に登ったところにある洞窟。その洞窟の深部にある、光草という薬草を取ってきて欲しいという依頼だ。

簡単な依頼だが、試験依頼はギルドが出す筈だったと思うのだが

……

彼は依頼書をニーナに返ししながら、

「ふむ、まあ頑張ってきてくださいね。レイヴ、しっかりとサポートしなさい」

「い、いや、僕はもうライセンスは持っているし……」

「おや、それならもう有りませんよ？ 剣を捨てたという時点で、私が破棄していただくようにギルド本部長に伝えましたので」

ヴェインがニツコリと満面の笑みでそう告げると、レイヴの顔が急に青ざめる。

「なっ！？ そんなこと、本人の同意がないと出来ないでしょう！？」

「フフ、私は、白銀聖騎士ですよ？ 陛下に次ぐ権力を持つ、十人の一人です。一人の権利くらい、簡単に無視出来てしまう」

クククツと気味の悪い笑いを漏らす兄を見ながら、レイヴの中では「最低だな」という感情が芽生えるのであった。しかし、そんな感情などお構いなしに、最後に彼は微笑みながら

「さあ、行ってらっしゃい。心配しなくても、学校は欠席になります」

せんよ。戦闘科に係のある依頼に参加するのであれば、むしろ成績アップです。もちろん、行き過ぎもダメですけどね」

レイヴはすっかり意気消沈して俯き、ニーナに慰められながらとぼとぼと歩いていった。

「まったく、バカですねえ」

道ばたで一人、ヴェインはそう呟きながら踵を返して騎士団支部に戻ろうと足を進め、懐のヘッドセットを取り出し片耳に掛けた。

「あ、ギルド本部長ですか？ ご無沙汰しています。……ああ、いえいえ、そうではなくてですね」

少し考えれば分かるでしょうに。あなたが剣を捨てると言った当時の事を。その時、私が何をしていたのか。

「一人、ライセンスの削除を願いたいのですが」

私はまだその時、白銀聖騎士じゃないんですよ。

第7話 洞窟に巣くう魔 1

数日前、グアンバルテ山脈中腹の洞窟深部。

「頼む……もう村には何もないのだ」

湿気の多い、じめじめとした洞窟内。コケが生えた岩のうえで、シワの多い老人が両膝をついて懇願するように組んだ手を挙げている。その姿を、まるで道端で死んでいる虫でも見るかのように何の興味の色も無い目で見ている妖艶な女。

目の前に立っていた女は、腰を折ってその指を老人の顎に這わせると優しく顔を上げさせた。

「では……1つ、あなた達が助かる術を教えましょう」

そして女は、老人の耳元で何かを呟いた。

十

「よし、通れ」

槍を持った門番は、依頼書の署名を学生手帳で確認してからニーナにそれを返した。依頼書を受け取った彼女は、そのまま先の倉庫の中に入っていく。レイヴも嫌々と言った風にその後へついていった。

ここはランドバイク 都市外での走行に特化した、戦闘用バイクの倉庫だ。都市内用の物とは違って二輪走行ではなく、空中に50センチ程浮きながら走行するためタイヤは付いていない。

先に更衣室で戦闘科に支給される戦闘服に着替えた2人は、バイク駐輪場に出てきた。

「レイヴ。お前、ランドバイク持っているのか？」

ニーナが先の鋭く尖った真紅のバイクの前で止まった。後部にはスタビライザーが2本伸びている。あのハイジャック未遂事件の後、飛行廷から降ろされたものだ。エンジンを入れると底部が蒼く光だ

し、空中にスウツと浮き上がった。

レイヴは頷いて「取りに行ってくる」と言い残して去っていく。都市と都市の間を移動するには飛行廷しかないが、村などの小さな場所に行くにはバイクや車両の方が良い。

「装備は？」

バイクを押して持ってきたレイヴに、自分のバイクを射出口に移動させながら問うニーナ。レイヴはその後について射出口に向かう。彼のバイクは、光沢のある漆黒に3本のスタビライザー。胴体部には狼のペイントがされている。

「魔弾式ライフル」

「ふむ、標準装備か」

そう言うニーナのバイクにも目立った装備はされていない。「ゴチャゴチャ付けるのは好きじゃないんだよ」と、苦笑気味に言うレイヴ。

すぐに射出口入り口に到着すると、目の前が開きその奥にあった長い通路が姿を見せる。先に見える一点の光に向かう様に道脇のライトが点灯し、ルートを示す。

2人がバイクにまたがってヘッドセットを着け、こめかみの部分に付けられたスイッチを押すとシールドが現れ、そこに地図と現在位置、バイクの状況等、様々な情報が表示された。

「良いか、目的地はリオラ。ルートはマップに表示されている。先導は私だ。ついて来い」

「OK」

上に見えるランプが青く点った。後部のノズルがすばまり、両機が蒼白い閃光を引いて走り出して行った。

対魔獣用に分厚くされ、堅牢な要塞の様に都市を囲む壁を抜けて外に広がる大草原に出る。草花を巻き上げながら宙を滑走する。

「到着まで1時間ちよつとだろう。そろそろ林道に入るから、スピードを下げるよ」

前を走るニーナの声をヘッドセットで確認しつつ、何気なく辺りを見渡す。

既に都市の防壁が端から端までが見える距離だった。辺りには広大な草の海原が広がっているが、森に近づくにつれて木が多く、そして比例するように生き物の気配も多くなっていく。

「入るぞ」

森の木々が光を遮り、地に落ちる影が陰影を深める中で、レイヴはとても奇妙なモノを感じていた。

静かな森だ。木々が風で揺らめき、バイクを止めれば少し離れた川の流れる音も聞く事も出来るだろう。

だが……

「静か過ぎる……」

元々このランドバイクは静粛性が高い。周囲の動物の鳴き声の1つや2つ、聞こえてもおかしくは無いはずなのだ。

「何か言ったか？」

「いいや。別にー」

マイク越しに返事をニーナに返して、目だけを辺りへ這わせる。近くには動物の気配が無い。感覚をいつもより研ぎ澄まして、もっと遠くまで探る。

段々と遠くを探る内に……

居た。

能力者とも違うまがましい程の魔力。魔獣だ。1体や2体では無い。群れで移動している。しかも、このままでは鉢合わせする。

いや、明らかにこちらに気が付いている。探ったのがばれたのだろうか？

違う。

ニーナの背中を見つめるレイヴ。彼女だ。彼女の膨大な魔力に惹かれていたのだ。

そう瞬間で推測するが、彼はこれも違うと気が付く。

魔獣は雑食だが、魔力を好む訳ではない。食べなくとも生きてはいける。魔力を好むのは……

そこで思考を止める。考えなくてもわかった。いや、考えるのすら恐ろしかった。

「最悪だ……」

顔を振って、少し悪態付く。

「どうした？ さっきからぶつぶつと」

気がつけば、ニーナが隣に並んで走っていた。レイヴは彼女の目を見て、

「ニーナ。引き返そう。これ以上は危

」

「帰ってもらっては困りんす」

レイヴの声を遮る様に上から女の声が響く。

それが聞こえ終わるのとほぼ同時に、空から氷柱が道を塞ぐようにして降り注いだ。

ハンドルをきって、咄嗟に激突を避ける。途端、道の両脇から魔獣が2人目掛けて飛び掛かってきた。バイクから跳躍、魔獣の攻撃をかわしたレイヴ達は、氷柱とは反対に着地して互いの背中を合わせて両脇を見遣る。飛び掛かってきた魔獣は、そのまま森の中に消えた。

くそう、これなら兄さんに言われた通り、彼女に銀装を渡しておくんだった。

魔力を抑えれば、察知もされづらくなるのだ。

「な、何だ！？」

慌てつつも魔方陣を展開してガンソードを出すニーナ。

「完璧に囲まれた」

「群れか！？」

「魔族だよ。魔獣なんかの比じゃない」

「そうでありんす。けれど、ぬしらを相手にするのはこのわっちでありんす」

「誰だ！？」

また空からの声。だが、姿は見えないはまだ。レイヴはまた感覚を研ぎ澄まし、魔族の気配を探る。魔族が相手となれば、こちらも死を覚悟しなければいけない。白銀聖騎士であっても場合によっては気を抜けない相手なのだ。

レイヴも昔、魔族の1人と戦った事があった。サシでは無かったが、それでも勝てる自信は無かった程だ。死闘は3日続き、共に戦った傭兵団は全滅、戦場になった町に至っては跡形すら残らなかった。兄弟がいても、あの被害は防げ無かっただろう。

そして、その脅威が今、たった2人の能力者に向けられている。だが、いくら探しても魔族の気配は無い。魔物との決定的な違いである、飛び抜けた闇が感じられない。その代わりに、あの中では異質な存在の気配。

これは……人？

「何故？」

「来たぞ！」

ニーナの声が聞こえるより前に、体が動いていた。彼女は右へ跳び、レイヴは反るように後ろへ跳んで空中で体を半捻り。その途中、空中から地を走る魔獣を見た。

2本のいびつに曲がる角が頭部から生え、筋骨隆々の体から伸びる腕は木の幹くらい楽にへし折ってしまいそうだ。

その魔獣は、さっきまで2人が居た所まで出てから、ニーナの跳んだ方に向けて走り出した。

レイヴの着地点には、3体の同じ魔獣。

魔方阵展開。雷系魔法、雷鎧。

体が光に包まれ、放電を開始する。落下のスピードに乗せて魔獣めがけ脚を振り降ろす。魔獣の1体の頭部が凹み破裂した。その反動を利用して、後ろへ回転して着地する。頭を粉碎された魔獣は、フラフラと何度か揺れた後、後ろへ倒れ込んでそれっきり動かなくなった。

前の授業で戦った魔獣よりも柔らかい。産まれてまだ間もないだろう。

魔獣はその大半が魔族から産まれる。後の少しは、魔獣同士での繁殖や闇の力に当てられた動物が突然変異を起こす場合だ。自分と対峙している魔獣は恐らく前者だろう。

だが、だからどうだという事ではない。魔族でないならば、恐るるに足らず。

拳を作り、構える。

魔獣は闘争本能の掻き立てるままに、その剛腕を振りかざし突進してきた。

次の瞬間、天に一直線に伸びる光が現れたかと思えば、地を打つ爆音と振動。しかしそれは、十数メートル離れた場所から伝わってきていた。

クレーターの中心で、呻いている魔獣。これが潰そうとした筈のレイヴは、頭が地面に着きそうな程に上半身を折り、右足を天を突くように上げている。

雷鎧脚技・飛翔雷天。ひしゅうらいてん

脚を下ろし、姿勢を元に戻す。魔獣の気配が段々と増えていく。

何故かその時、彼は笑みが止まらなかった。

魔族が相手だと言うのに、心が狂喜していた。

これ全てを叩き潰したら、自分はどれだけ元に戻るだろうか…

…考えれば考える程に、楽しくなる。昔ならこんな事は思わなかっただろう。だが、嫌いじゃない感情だ。

「グオオオオオッ！」

轟音が空気を震わせ、その剛腕を振りかざし、ぎらついた目が巨軀とともに二ーナへ真正面から迫る魔獣。汚らしく唾液を垂れ流す口からは、鋭い牙が見え隠れしている。

彼女は右足を後ろに下げて姿勢を低くし、右手を顔の前へ銃口を

上に向けるように、左手は腰の後ろに当てて銃口が下を向くように構える。魔力を全身へ流す。

魔獣の右腕が、斜め上から叩き付けるように振り下ろされる。

瞬間、ニーナは右足を中心にして円を描くように半回転。その力に乗せて、右腕を肩から横へまっすぐに伸ばし、迫る魔獣の腕に突き立てた。ガンソードが見事に貫通し、緑の血を手から噴き出す。耳をつんざく様な、その体からは似つかわしくないほどの甲高い奇声を、後ろへ仰け反りながら天に叫ぶ魔獣。

その反らされた首筋に、背中を向けたままで左手に握ったガンソードの照準を合わせ、引き金を引こうと指に力を入れる。

しかし、

「ガアアアアアッ！」

「二体目！？」

左から現れた魔獣に気を取られタイミングを逃す。

1体目の首筋に合せた照準を、二体目に流すように合わせて発砲。魔弾は相手の顔を掠めるだけ。だが、確実にひるんだ。スピードが落ちている。

十分だ。

今度はそのまま、左足を軸にして時計回りに回転する。そして、腕に突き刺したガンソードを滑らせるように引き抜き、撃ち損ねた首筋を小指ほどの深さまで切り裂いた。

ブシュッと緑の血液が彼女の上を覆い、さっきよりもさらに大きく叫ぶ魔獣。

そのまま右腕のガンソードも、二体目に照準を流すように合わせて発砲。今度は腹に命中。魔獣は止まり、一、二歩だけ後ずさる。

一体目を真正面に構えたところで、さらに後ろへ跳躍。

「ちい……さすがにしぶといな」

二体の魔獣は、鈍い動きなりながらも態勢を立て直そうとしている。首を切り裂いても即死しないとは、羨ましい様な、ただホラーチックなだけの様な。

その時、魔獣が腰を低くして頭の角を前に突き出す。微かな魔力の流れが、角と角の間に集中していくのが感じられる。

「……ん？」

暗黒系魔法、滅鬼^{めつき}。

黒い閃光が二本、ニーナに向かって宙を走る。

「くそっ」

かわし、一気に魔獣との距離をつめようと駆ける。そのとき、またあの声が響いた。

「甘いでありんす」

氷系魔法、氷牙^{ひょうが}・群れ。

三角錐の形をした氷が無数に、左一方行からニーナへ降り注ぐ。

ニーナは目を丸くした。

しまった。魔族も居るんだった。

しかし、彼女はそのまま直進して、迫る氷をガンソードで薙ぎ払い、撃ち落とす。しかし全てを壊せはしない。逃した氷が体に傷を与える。それでも、致命傷を避ける為に手を休めはしない。

そこに魔獣の豪腕が左から加わった。両脚に魔力を流し跳躍。しかし氷牙はマトをニーナに絞っている。空中で腕を左に伸ばし、引き金をめいっばいに引き続ける。

「だから、甘いと言ったでありんす」

後ろからの声。まさか、いつの間に背後へ！？

首だけで後ろに振り向く。キレの長い目からは射殺するような殺気を放ち、髪を後ろで結っている女が口元に鉄扇を当ててそこにいた。「に、人間！？」

魔族ではない。では何故私たちに攻撃を？ 何故魔獣を従えている？ その事を、一瞬考えてしまった。気がついたときには、後頭に強い衝撃。女の放った上段回し蹴りが当たっていた。空中できりもみし、地面に叩き付けられるニーナ。

「ぐっ……き、貴様」

脳が揺れ、意識が朦朧とする。強力な一撃だったようだ。

二体の魔獣がゆつくりとこちらへ向かってくる。このまま止めを刺される……そう薄れる意識の中で思っていると、さっきの女がニーナと魔獣の間に立った。

「ぬしらは向こうの男を片付けてきんなし。ただし、殺してはいけません」

それが、意識を失う直前に聞いた最後の言葉だった。

十

「……ほう、グアンバルテ山脈の魔獣が……ですか」

書類にペンを走らせながら、ヴェインはエレナの言葉を聞き流す。彼は今、自分の執務室で仕事をこなしている最中である。

「ええ、商隊を襲っていたみたいだね。他じゃ珍しくも無いことだけど、あそこだと事件じゃない？ あ、これもサインお願い」

エレナの差し出した書類を受け取る。

確かに事件だ。この学園都市も、付近の魔獣が比較的大人しいという安全面から作られたもの。この話が都市に広がって不安を生徒たちに与えるわけにはいかない。一般兵士では苦戦するだろう。ここは騎士を出して対処させるべきか。

「……ん、そういえば、レイヴが麓の村に……」

「あらそうなの？ でも、あの子なら死ぬことは無いじゃない？」

「死にはしないでしょうねえ。しかし、ニーナさんが心配だ」

「ニーナ？」

「ああ、彼の友人です。実力はまあまあにあるのですが……」

魔獣が凶暴化する理由としては、成長によるものと強大な魔力、主に負の魔力にあてられるなどが考えられる。前者の場合は個体が凶暴化するにしか過ぎないが、後者の場合は多くの魔獣が凶暴化する可能性がある。話から考えるに、今回は後者だろう。つまり、付近一帯に影響を及ぼすような強大な負の魔力をもつ存在がグアンバルテ山脈にいるという事だ。

ここまでで、彼の頭の中にはその存在が何であるか、察しがついていた。

能力者も負、ぞくに言う闇の魔力を扱うことも可能だが、好き好んで周囲の魔獣を凶暴化させるような事はしないだろう。魔獣が凶暴化してもなんら困らない。それどころか、コントロールすることもできる存在。

思わず、ため息が出てしまう。流石に相手にはしたくない存在だ。そして心配と言ったのも、その存在が魔力を求めるという事からだった。

「魔族か……」

「え？」

エレナの疑問符には答えず、ヴェインは椅子から立ち上がるとコート掛けに向かった。

「ちよ、兄さん。まだ仕事か」

「後はあなたに頼みます。昔からあなたは、私よりもデスクワークが上手いですからねえ」

「そ、そんな勝手な！」

コートをコート掛けから外して身に着けると、苦笑しつつ手をヒラヒラとさせながら執務室を出て行こうとするヴェイン。その足が半分部屋から出たとたん、彼は止まって顔をエレナに向ける。

「ああそうそう。ニキイはどうしました？」

「え……都市を見回ってくるって……」

ならば、一人で行くでしょう。

「そうでしたか。では、ニキイには私が出かけたのはナイショで」「ナイショって！ 大体どこに……」

エレナの言葉を最後まで聞かないで、部屋から出てドアを閉める。まったく、エレナは口うるさくなってしまった。昔はおとなしくて可愛い子だったんですが……と、そんなことを考えながら長い廊下を玄関に向かって進む。

彼、白銀聖騎士の仕事の一つではあったが、進んでやりたい仕事

でもない。それに専門分野ではない。しかし、今の第一人に任せるには実に荷が重過ぎる仕事ではある。

またため息が出る。

しかし、彼の笑顔は変わらない。

「魔族狩りか……久しいですね」

十

「……まだ来るのか」

もう十体以上は倒した。しかし数が数だった。周りには未だに三十体は居る。『雷啼^{らいめい}』さえあれば一蹴できるかもしれないが、如何せん今は持ち合わせていない。それに二ーナのことも気になっていた。少し前から気配が消えたのだ。連れ去られたのか？

（それとも……）

一瞬最悪の事態が頭をよぎったが、頭から無理やりその考えを締め出す。これは魔族が裏で糸を引いているはずだ。だとしたら、彼女は生かして魔族の場所まで運ばれる筈。ここでいきなり殺されはしない。まだ助けに行けば間に合う可能性もあるはずだ。

そう算段をつけると目の前の魔獣にマトを絞り、走り出して跳躍。一気に間合いを詰める。

雷凱拳技・尖雷。

左手で角をガシツとつかみ、顔面に拳を叩きつけた。頭蓋を破壊し、顔面を見るも無残にへこませる。次に右手でも角をつかみ魔獣の胸に両脚をつける。両手を放して、足をばねにして背面跳びの様に後ろへ跳躍。

顔の潰れた魔獣は、グラツと後ろへ倒れてあおむけになる。

空中で回転し体制を縦に。跳躍の勢いのままに後ろに居た魔獣の首に肩車のように乗ると、上半身を一気にそらせて逆立ちするように頭を下へ向け、両手を地面につける。そのまま足を魔獣の首に絡めて、下半身も勢いに乗せて百八十度折り曲げ魔獣をさらに後方へ

数体の魔獣を巻き込ませるように投げ飛ばす。

背中の方から魔力。

腕を折り曲げて力を溜め、一気に伸ばして空中へ。ぎりぎりのところで指先をかすめ、黒い閃光が、先ほど投げ飛ばした魔獣によって出来た山に直撃した。

爆発し、血肉が四散する。かろうじて意識のあるのは、奇声をあげ続けていた。

仲間意識はみじんも無し……命令に従って動く以外には何もできなさそうだ。

あたりを囲む魔獣をそう分析しながら、ペースを整えるために木の枝に着地する。

魔獣はたいていの場合、自ら考える頭をもたない。ただ自らの主人が命令する行動をとるだけで、戦略的な動きができて戦術的な動きがほとんどできないのだ。さらに言えば、魔獣の能力や頭脳は生み出す魔族からも決まってくる。

「これくらいなら……中級か」

魔族は、低級、中級、上級、悪魔、爵位級悪魔の五つに分類される。これらを総称して魔族と呼ぶのだ。上の者が魔獣を生み出せばそれは強く、下が生み出せば弱い。中級は下から二番目。しかし、下から二番目だから弱いわけではない。彼らは人間よりも、能力者よりも優れているのだ。

このまま木と木を跳んで二ーナを追おうと足に力を入れた瞬間、
「グアアアアアッ！」

一匹がレイヴの着地した木の幹を殴りつけた。
ズシンツと振動したあと、バキバキと音を立てながら幹が傾きだす。レイヴの視点もそれに比例するように地面へと近づく。

バランスが崩しながらも何とか跳躍すると、数メートル離れた地面に片足を広げて腰を低く着地。そのまま一番近い魔獣に足払いをかけて、真横に転倒させる。すかさず立ち上がり、倒れた相手の口目掛けてめ一杯に力を溜めた蹴りを振り入れる。雷凱をつけた状態

の蹴りを受け、バシユンツと首から上が消し飛んだ。

「……柔らかいな」

地面に転がっている、今さっき吹き飛ばした魔獣の頭を見つめてつぶやく。

脚技でもないのに頭が吹き飛ぶという事は、本当に生み出されたばかりのが出てきているのようだ……。

顔を上げてあたりに目をやる。一定の距離を保ってこちらを見ている魔獣。逃げ道は無いと言わんばかりに周りを囲み、低くうなり声を上げている。しかし、飛び込んでくる気配は感じられない。恐怖心からか、少しだけ知的なのか、いずれにしても相手の動きを見ようというのは正しい判断だ。

「……っと、そんな事より早く行かないとな」

さっさと片を付けなければいけないのだ。どうでもいいことなどにかまっている暇は無い。しかし、まだまだ魔獣の数が多い。強力な魔法を使おうにも、この後の魔族との戦いを予想すればあまり使いたくは無いのだ。

さて、どうしたものかと拳を握って構えようとした時だった。

「お困りのようですね」

聞き覚えのある声が背後から聞こえてきた。凜としていて、どこか弾むような陽気さをもつその声を聞いただけで、相手がどんな顔をしているのかが想像できてしまう。

その声に反応して「な」と後ろに振り向いた瞬間、視界が赤一色に染まった。血を高々と空に上げながら、魔獣は見るも無残に切り刻まれて次々に死屍累々と成り果てていく。魔獣たちは何が起きたのかも分からなかっただろう。ただ突如として空間が、風が、自分たちを切り裂いたのだから。

「……に？」

背後に居る、まだ無傷の魔獣たちが騒ぎ出している。彼への恐怖心が芽生えたのだ。弟であるレイヴ自身の本能も意思とは別に、ここから早く逃げろと告げている。片足が後ろへ滑る様にぎこちなく

動く。たった三文字の命令に足の筋肉が素直に従おうとするのを、何とか押しとめるのがやっとだった。

「だらしないですよ。それで本気ですか？」

首に銀色のクロスのパendantを下げて、クスクスと口に手を当てて微笑する顔。大量の血飛沫が飛び散り、雨のように降り注ぐ中を純白のコートを悠然と風に靡かせながら、ヴェインが歩いてきていた。見たものを、恐怖のどん底に叩き落すような微笑を顔一杯に湛えて。

やはり、兄さんは恐ろしい男だ。

レイヴは隣までやってきた彼を見てそう思った。強さではなく、その姿を見てだった。確かにさっきの攻撃も、今のレイヴには繰り出す事も出来なければ見切る事すら出来ないものだ。だがそれよりも、その姿こそ狂気せざるを得ない対象なのだ。

血飛沫の雨の中を歩いてきた筈のヴェインのコートには、血の一滴すらついていないのだから。

「グアアアアアッ！」

「グギヤアアアアアッ！」

一体が雄叫びを上げ前に踏み出し、それにつられるように周りからも声が上がります。その歩みは次第に速まり、津波となって押し寄せた。

「やれやれ……」

ヴェインは、呆れた様に苦笑しながら片手を魔獣たちに向かって突き出すと、指をパチンツと鳴らした。

ただ、それだけでけりがついた。

ヴェインの前に魔方阵が出現し、津波と化していた魔獣は、次の瞬間には先頭から次々に宙に舞い上がり細切れになっていた。血飛沫さえも目に見えないほどに細かく小さくなって、濃霧のように空を紅く染めている。レイヴが苦戦したこの数の魔獣を、ほんのお遊

びだといわんばかりに、あっという間にけりをつけてしまった。

「ただ群がって突撃など愚の骨頂。相手をするのさえ腹立たしい。しかし、こんな無能に対して時間を費やすあなたの方が、さらに腹立たしいですね」

「に、兄さん……なんでここに」

紅い霧と肉片が落ちてくる中、レイヴはヴェインの顔を見上げるが、彼が向く気配はない。彼の横顔は、いつもの微笑を湛えているだけだった。

「くだらない質問です。今のあなたからすれば、魔族を一人で倒すなんてことは不可能なのですから、丁度いいでしょう？」

珍しくつまらなそうにそう言っていると、ヴェインは跳躍して姿を消した。レイヴはヘッドセットのこめかみ部分にあるスイッチを押して地図を確認する。おそらく村に向かって跳んだらう。

レイヴも雷凱を止めると、バイクのところまで走り出した。

+

ピチョンッ

「う……くっ」

冷たい感触が頬に当たる。ツツツツと頬を這うその感触で、ぼやけた意識だけがニーナに戻ってくる。

うつすらと目を開いて、あたりを確認する。

ジメジメとして薄気味の悪い空間。光もろくになく、どこまでこれが続いているのかもよくわからない程だ。

ここはどこだ？ 私は……気を失ったのか？ それで捕まって……レイヴは？ レイヴはどうした？ ああ、頭が痛い。

手で頭を押さえようとするが、手が上がらない。どうやら柱に縛られているようだ。

その時ポウツと、柔らかい明かりが当たりに広がった。どうやら、ここは洞窟のような場所らしい。

ゴツゴツとした岩肌には、ところどころにコケが生えていた。

「起きたのかしら？」

女の声。しかし、さっき聞いた女の声ではない。何とか声の方向に顔を向け、その姿を見る。黒く胸元が大胆に開いた服。片足だけを覆うひらひらとしたドレスには、奇妙な模様がデザインされている。もう片方の足は、極端に短くテカテカした素材の物をはいていた。そして、ニーナを見ているはずのその目は、腐ったドブの様に濁った灰色で光も何も映してはいない。

魔族か……と、ニーナは目を見て確信した。一般的な魔族は目が濁った灰色だという。

「マジエリヌ。人間が二人、村に向かってきてありませんぞ。一人は新しい顔であります。しかもどうやら、相当の手練」

今度は反対の方から声が聞こえてくる。どうやら、さきほどの女らしい。首を向けようとしたが、そちら側にむけようすると激痛が走る。

彼女は向くのを諦めて、女の言ったことを思い出す。

人間が二人……二人？ 一人はレイヴだとして、もう一人は誰だ？

「あら、そう？ では、強そうな方を片付けないさい。弱そうな方は魔獣で何とかするわ」

マジエリヌと呼ばれた女は、フンツと鼻を鳴らして女に命令した。しかし女は、シレッとした態度で返答する。

「わっちにまた命令する気か？ わっちは、ぬしがへまをやらんように見張っているだけであります。ぬしの部下じゃありません。勘違いされては困ります」

その言葉がよほど癪に障ったのか、マジエリヌは魔方陣を足元に展開して、レイピアを取り出した。

「勘違いしているのはあなたの方よ。あの方のお気に入りだかなんだか知らないけれど、所詮は人間。あまり調子に乗らないでほしいものね。食い殺すわよ……？」

「……まあいいであります。では、行ってきんす。くれぐれも、

その子供を食^{かむ}うでないぞ？」

女はしぶしぶといった感じの声を出しながら、その場から離れた。マジエリヌもしばらく憤怒の表情のまま、彼女の後姿を見ていたが、姿が見えなくなつたとたんにニーナに歩み寄ると、背筋の凍るような笑みを浮かべてながら手に持ったレイピアを首元に突きつける。

「あなた……綺麗な顔ね。報告の通りの魔力……」

そう言いながら、切っ先を首元からゆっくりと下へおろす。

「うつ……くうつ」

「肌も白くて……羨ましいわっ！」

シュンツとレイピアを勢いよくおろして、彼女はニーナの戦闘服を真ん中から切り裂いた。露わにされた肌。胸はギリギリのところ。戦闘服が隠しているが、ニーナにとって羞恥の姿であることに変わりはない。

「貴様……仲間が来たら始末してやる……覚悟しておけ」

そう言つと、マジエリヌはぱかんとした様な表情を見せ、次に笑い出した。

「アハハハッ、あなたの仲間がここに来るという事は、今のあなたのように縛り上げられるということよ？」

「私の仲間は、貴様なんかには負けたりはしない……」

「そう？　なら、楽しみに待っているわ。あなたの仲間がここに来るのを」

顔を近づけて、意地の悪い笑みを浮かべるマジエリヌ。ニーナもそれに習つて生意気な笑みを作つてみせ、ペツと彼女の顔目掛けて唾をとばしたやつた。

「なっ、なんて事を！　私の顔に！　顔に！」

マジエリヌは両手で顔を押さえて発狂し、怒鳴り散らす。

「いいざまだ。お似合いだぞ」

「いい度胸ね！　あなたはあのお方に差し上げるつもりだったけど、我慢ならないわ！　……あなたの目の前でむごたらしく仲間を殺し

て、最後にあなたも殺してあげる」

そう言い放つと、マジエリ又は踵を返した。その瞬間、辺りを包んでいた光は消え、ニーナの周りはまた暗闇に覆われた。

第8話 洞窟に巣くう魔 2

「……妙ですね」

村の入り口に到着したヴェインは、辺りを見渡してそう呟いた。人の気配が無いに等しい。いや、それはさほど不思議ではない。さつきまで近くで魔獣が暴れていたのだから、それに気が付いて避難した可能性も十分にありえるのだが……唯一感じられる気配が異様なのはなぜだ？

「随分と嫌な魔力です」

「兄さん！ ニーナは！？」

少し遅れてレイヴが、バイクに乗ってやってくる。ニーナのバイクも、自分のバイクにつなげて牽引している様だ。ヴェインはその様子を横目で一瞥する。

「居ませんね……負の魔力が高い方向に向かえば間違いないでしょうけど」

「じゃあ、早く向かおう」

「ええ、そうですね。ですが、先に行っていてください。私は村人の安全を確認します」

焦った声で言うレイヴとは違い、ヴェインは至って冷めていた。彼自身、ニーナを見殺しにしようとは思ってない。ただ、先にこっちの方を片付けなくてはいけない。そう感じただけだった。村人の安全など、元から確認する気はない。

「わ、わかった」

ヴェインの只ならぬ雰囲気を感じ取ったのか、それとも今になってこの気配に気がついたのか、レイヴは前だけを見て村のメインストリートをバイクで走り抜けた。

残されたヴェインは、村の入り口でただ立ち尽くし意識を集中させる。どこかに居るはずの、敵を探すために。

実に見事だった。相手はヴェインに位置を知られないよう、巧み

にデコイを仕掛けている。それらに引つかからずに、自分に確実な殺意を向けている本体を探し出す。

自分ならどこで相手を見張る？　そう自問自答していくつかの候補を上げるが、詳しく探ればその場所すべてに何か気配がある。

さらに考え、最終的な候補を2つまでに絞り上げる。

自分ならば、少し左先に見える白壁の家の屋根へ続く階段裏か、右の丘にする。片方がデコイ、もう片方は本体。外せば後ろから攻撃される。

「賭けですねえ……」

苦笑しつつコートの中に両手をいれ、それぞれに同じナイフを取り出す。刃背に鋸刃が付いていて柄に簡単な収納箇所がある、一見典型的なサバイバルナイフだが、仕掛けが存在する。

ナイフを逆手に持ち、柄の底に付けられたボタンを一押しすると、刃の付け根から何かの液のような物が染み出し、刃を伝っていく。さらに両手首の仕掛けナイフを飛び出させ、これで彼の戦闘態勢は整った。

さて、どっちに居るだろうか……高低差でいえば丘に陣取るが、見張りのしやすさで言えば屋根だ。一長一短。ここは迷っても仕方が無い。

跳躍し、腕を振りかざす。

狙ったのは……丘！

「はずれでありんす」

背後から女の声。次の瞬間、鉄扇での鋭い突きがヴェインを襲う。「ええ、そのようで」

女は虚空を突き、ヴェインの姿は女の後ろにあった。風系魔法による浮遊術で、瞬時に回り込まれたのだ。

「ちっ」

女はさほど動揺するでもなく、振り向きざまに左手で裏拳を叩き込んでくる。すかさず、ヴェインは逆手に持ったナイフをその裏拳に突き刺して動きを止めると、刺したナイフから手を離して、手首

から伸びる二十センチはあるであろうナイフを、その後頭部に突き立てんとストレートを一発。

「なんの！」

空中で前回りの要領で回転。ヴェインのパンチがはずれたかと思つた次の瞬間、女の両足が彼の腹部を直撃した。

「くっ」

突き飛ばされるヴェイン。蹴られながらも体制を立て直しながら落下する。

女は、蹴った勢いで空中でクルクルと回転しながら着地すると、口元に鉄扇を当てて跳ばされたヴェインへ半身を向けた。

ここまでの行動をわずか一瞬で、しかも空中で二人はやって見せた。

ここだ。

ヴェインの口の端が、かすかに上がる。

彼のつま先に小さな魔方陣が緑色の光とともに出現し、魔法の顕現を示す。その光を尾にして、彼は足を腰の位置まで上げる。

風系魔法、烈風・斬首。

刹那。横に薙ぐにして振られた彼の足からは、刃と化した風が放たれ、女に向かって空を切り翔る。

「ほう」

感心したように呟くと、鉄扇をゆったりと前に突き出した。

氷系魔法、氷壁。ひつへき

女の目の前に水色の魔方陣が現れ、そこから天に向けて一直線に巨大な氷の塊が飛び出す。その厚さは大人三人分はあるだろう。

次の瞬間、ヴェインの魔法がその氷の壁に直撃する。

防ぎきつた。そう感じた女が次の行動に移ろうとした瞬間。

……ピシッ

「ぬ？」

氷全体に亀裂が走り、壁はあっという間に瓦解した。

「……ぬし、何者でありんすか？」

片眉を少しだけ吊り上げて、氷の粒の向こうに見えるヴェインの姿を凝視する女。

ヴェインはにこやかに、女の質問に答えた。

「申し遅れました。私、^{わたくし}ヴァルエランス皇国白銀聖騎士団、第七部隊隊長を務めています。ヴェイン・アルシュメッツ・バルトフェルドと、申します。以後、お見知りおきを。」

「ほほう、ぬしがあの……笑う死神、でありんすか」

女はまた口元を鉄扇で隠すと、やんわりと微笑む。

「おや、昔の二つ名をよくご存知で。しかし、それは今になって聞くと随分と幼稚な名前ですねえ」

「そうになると、わっちも本気でいかなければ駄目でありんすなあ」

鉄扇が女の口元でゆっくりと開かれ、描かれた黒薔薇の園があらわになると、女は手の甲に突き刺さったナイフを引き抜き、ヴェインに一直線に投げ返す。

「ふむ」

それを顔すれすれの距離でとめて見せると、何事も無かったように逆手で持ち直す。

女は深々と出来上がった傷からあふれ出る血を舐めると、にこりと不気味な笑みを作ってみせる。

「ぬしは本気を出さないのでありんすか？ わっちは、ぬしのデスサイズという武器を見せて」

ドサッ

左腕に突如としてそこだけが跳ね上げられるような感覚。左前方には、人の腕が単体で落ちてきた。その手の甲からは、血が滴っている。あまりの出来事に、女は何も理解できない。

「何か、おっしやりましたか？」

につこりと微笑み、ゆっくりと女に近づくヴェイン。

女が、彼を恐怖の混じった目でみる。

「ぬ、ぬし、今何を
ズシャン

次は右腕が突如として跳ね上げられるような感覚。目の前に、鉄扇を握った腕が落ちてくる。不思議なことに、痛みは感じない。

「私ですか？ 特に何もしてはいませんが…… どうかしましたか？
ずいぶんと顔色が優れないようですが……」

ヴェインはただ、クスクスと笑いながら女に歩み寄る。

女はもはや、恐怖という感情ですら通り越えていた。

あれは、何だ？ わっちの腕か？ ありえない。あの男に魔方陣は出現していなかったはずだ。手だつて、動いていなかったはずだ。ではなぜ…… なぜわっちの両腕は無い……！？

「く、くるな！ くるなあああああつ！」

もはや、さっきまでの威勢はどこかへ消えていた。女はただ叫び、ただ笑つて近づいてくる死という存在を、遠ざけようとしていた。

「別に何もしてないじゃありませんか」

突然、耳元に、くすぐる様な吐息とともに何かが喋りかけた。

女はゆつくりと、震える顔で振り返った。

そこには、何もいなかった筈だ…… そう、言い聞かせながら。
「どうかしましたか？」

にこやかな微笑とともに ヴェインはそこにいた。

次の瞬間、地面を踏みしめていた感覚が消え去り、浮遊感が女を襲う。落ちていく視界。しかし意外なことに、体はすぐに何かにぶつかった。

これは…… 地面か？

ドサツ

目の前に、また何かが落ちてきた。いや、今度は倒れてきたようだ。

…… 脚だ。わっちの…… わっちの脚だ。

あ…… ああ、あああ……

「ああああああああああああつ！」

痛みすらない事が、恐ろしかった。

「……さて、そろそろいいでしょうか」

近くにあった手ごろな岩に腰掛けていたヴェインは、立ち上がって伸びをすると、少し離れた場所で腰を抜かしてほおけている女に近づく。

「あのー、聞こえますかー……？」

「あ、ああ……腕が、脚が……あが、がが」

苦笑しながらヴェインは顎に片手をやると、もう片方の手で女の手の甲に刺したナイフを弄ぶ。

新しい幻覚作用の毒を買ったので試してみたのだが……どうやら刃に流す液が原液のままで、薄まっていなかった様だ。しかも様子を見るに、四肢が切取られるような幻覚を見ているようで、非常におびえている。

少しだけ嫌な汗をこめかみに浮かべながら、このまま女はここに置いておいても十分に大丈夫そうだと判断すると、コートを翻してヴェインは逃げるように跳躍した。

十

「この、洞窟か……？」

バイクを洞窟前に止めたレイヴは、中を窺いながらつぶやいていた。その声は、内部に静かに響いていく。

目を瞑り意識を集中させ、洞窟の奥を調べる。

意外と入り組んでいるようだ。そして広い。この山の付近一帯に、縦横無尽に延びているようだ。だが、負の魔力を追えば簡単に見つけられる。そうして、もう少しで位置が分かると思った瞬間

「っ！？」

強大な魔力が、レイヴの魔力を伝って彼に恐ろしい映像を見せ付ける。

どうやら、一定距離から更に探ろうとすると、恐怖心を植えつけるような映像を逆流させる魔法が貼られている様だ。

雷系魔法、雷凱。

ぽうつと、淡い光とともにレイヴの額に魔方陣が現れ、全身が電気を帯びる。次瞬、覚悟を決め彼は勢いよく駆け出した。

早く。早くしなければ、ニーナの身が危ない。やっと見つけれただんだ。自分がもう一度戦う、剣を握る理由なんだ。

そのレイヴの思いを邪魔するがごとく、暗闇の底から、魔獣たちが現れる。

「ジャマだあっ！」

魔方陣がレイヴの握る拳に現れた。

雷系魔法、龍殻壊撃・咆電。りゅうかくかいげき ほうでん

突き出した拳から雷が放たれ、魔獣の群れに穴を開ける。徐々に縮まるその穴に飛び込み、近づく魔獣から片っ端に殴り倒して突き進む。

殴り飛ばした魔獣の生死なんて関係ない。道さえ開けばそれでいい。追ってくるなら、ニーナを助けた後に、魔族もろとも殺せばそれでいい。

「ニーナアッ！」

その叫びは、闇の中に木霊する。

「っ！ レイヴ！？」

暗闇の中、ニーナはレイヴの声を聞いた気がしてハッと顔を上げた。しかし、いくら見渡してもそこには闇だけが広がり、目が慣れるということもない。ここまで暗闇に目が慣れないということは、おそらく何かしらの視覚魔法だろうか。

「……くっ」

対抗魔法が使えれば取り払うことも可能だったかもしれないが……と、ニーナは下唇をかんだ。

すべて己の未熟さが生んだ結果だ。もう少し鍛錬をしていれば、こんな状況にはならなかった筈だ。そうだった筈だ。レイヴと離れたのがそもそもの間違いだ。魔獣が群れであつたなら離れるのが危険なのはわかつていた。しかも、魔族まで居たんだ。少し考えていれば、こんな事には。

考えれば考えるほど、自己嫌悪になる。レイヴの強さを見て、自分まで強くなっていた気になっていたのか？ 馬鹿馬鹿しい。強さとは、日々の鍛錬でのみ得る事ができる物の筈だ。どんな強者でもそれを怠れば弱くなるのだ。私は、日々の鍛錬さえレイヴには遠く及ばないし、やってきた数も違う。

「愚か過ぎる……くそっ」

「あらあら、ぶつぶつとうるさいわね。あなた」

暗闇の向こうから、マジエリヌと呼ばれていた女の声。ニーナは見えないと分かっているにも顔を動かして場所を確認しようとする。

「どこにいる！」

「あなたのすぐ近くよ。まあ、見えないから仕方ないけど。……ほら、姫君^{あなた}を悪の根城から救いだすために騎士様^{ほつや}がやってきてくれるわ。でも、ハッピーエンドなんてありえないのよ」

「レイヴは貴様なんかに負けたりはしな　っ！」

胸の中心に何かが突きつけられ、そこから血が染み出し肌を伝う感触が、脳に伝わる。

「あのぼうやが叫んでいるのを聞いたのだけれど、あなた、ニーナって名前なの？　よく似合ってるわ」

力を緩めゆつくりと、さつき戦闘服の上を裂いた時のように刃を下に移動させるマジエリヌ。その刃が、今度は腰で止められる。

「次は……下、いっちゃいましょうか……ねえ？」

「くっ、下種がっ」

腰に突きつけられたレイピアに、力がこもるのが分かる。

歯をかみ締めて目を瞑り、ニーナは俯いた。その時

「やめろ！」

洞窟内に響く、新しい声。力強く響くその声に、マジエリヌは振り返った。そこには、雷凱を発動した状態のレイヴが立っていた。

「あら……もうここまで来たのね。まあちょうど良いわ。死に様をこの子に見せてあげる予定だったのだし」

ニタアツとレイヴに笑いかけるマジエリヌ。彼女はレイヴに体も向け、パチンツと指を鳴らしてニーナの視界を遮っていた魔法を解いた。ニーナは、レイヴの姿を確認しようと顔を上げて叫んだ。

「レ、レイヴ！」

「ニー……っ！」

ニーナの声に反応して、マジエリヌの向こうに見える彼女の姿を見ようとしたレイヴは、その姿が視界に入るやいなや赤面してしまった。

今ニーナの戦闘服は真ん中から裂け、普段は露出しない白い肌が見えている。胸は見えていないものの、まったく見えていない訳ではないので、目のやりどころにこまる。ニーナ自身もそれに気がつき、真っ赤に顔を染めた。

「さて、純情ぶりを振りまいてるところ悪いのだけれど……惨たらしく死ぬのと四肢を細切れにされて死ぬの、どちらがよろしくて？」

「え、選ぶのは、お前だ……っ！」

疾走し、マジエリヌへ拳を放とうとするレイヴ。

「そうかしら」

つまらなそうに、マジエリヌは言い放った。

暗黒系魔法、鬼手。おにで

突如としてマジエリヌの影から、自分の身体ほどの太さはあるような巨大な黒い腕が飛び出し、レイヴに掴みかかった。

「がっ!?!」

「はい、これでお終い」

腕に力が込められ、レイヴはもはや逃げられなくなった。

雷凱は打撃一つ一つに電撃が伴う。しかし、それは肉体を持つものに對してだけ。こう魔法につかまれては、逃げられないのだ。

「ぐ、あああああああつ！」

レイヴの骨が、筋肉が、全身がと悲鳴を上げる。痛みから逃れようと、体が暴れる。だがしかし、腕の力は尋常じゃない。もがけばもがくほどに、命が磨り減っているようにさえ感じる。痛みで集中力が途切れ、雷凱は消え去ろうとしていた。

その様を恍惚とした笑みを浮かべて見ていたマジエリヌの足元に、魔方阵が現れる。そこからゆっくりと、儀礼用の様な装飾のついたレイピアが浮き出てくる。

「ほうら、もう少しで折れちゃう。……所詮は人間。我々魔族の足元にすら及ばない」

レイピアがマジエリヌの手に握られ、その切っ先はだんだんと上るとレイヴの右肩でピタリと止められた。

「でも、簡単には殺さないわ。この子に絶望と恐怖を与えて、いたぶっていたぶって、あなたを殺した後で、更にゆっくりと殺してあげるんだから」

そう言つて、彼女は顔を歪ませて下卑た笑みを浮かべると、レイピアをレイヴの肩にズブズブと押し込んだ。

彼の叫びが、一層痛ましく惨憺さんたんなものへと変貌する。しかし、マジエリヌは力を緩めることはしない。それどころか、彼女の顔はさらに歪み、恍然こうぜんたるものになっていた。ニーナは、仲間が絶叫し死の淵へと追いやられていく中、もはや恐怖のどん底からすら落とされそうになっていた。

「や、やめろお！ レイヴを放せえ！」

「あら、さっきまではこの子が勝つと言っていたのに……」

マジエリヌがニタニタと、ニーナの叫びをいやらしい笑顔で眺める。

「ぐうっ……き、さまあっ！」

痛みを堪えながらレイヴがマジエリヌを睨み付ける。

一瞬でいい。痛みを忘れ、すべてをこの一撃に集中させる。

次瞬、彼の口に魔方阵が現れた。そこに集まった電気が、バチバチと音を立てだす。

途端にマジエリヌの表情がこわばったものへと変わる。

「まさか!？」

咄嗟にマジエリヌがレイピアを引き抜き、射線から外れようと横へ跳んだ。それと共に、彼女の影から出ていた腕も消え去る。

瞬間、彼女の頭を掠って雷の閃光が奔り、洞窟の壁に激突した。

しかし、衝撃はこない。

「……っ、貫いた？」

ニーナが目を見開き、遠くに小さく見える外の光を壁にできた穴から見ていた。

そう。今レイヴが放った魔法は、壁を抉る（えぐる）でもなく、崩すでもなく、ただ、貫いたのだ。

それはそうだ。なにせ今の魔法は、硬く分厚い鎧よろいに身を包んだ、

天空を支配する者を倒すための魔法なのだから。

「おまえっ……滅龍魔法を！」

マジエリヌがさっきまでの口調を一変させてレイヴを睨みつけた。レイヴは咳き込んだ後、マジエリヌに不敵な笑みを見せ付ける。

滅龍魔法。

魔族、天使族と並ぶ三大列強種の一つ、龍族を倒すための超高等魔法。上級魔導師ですら習得するのに十数年も費やすというこの魔法は、ただの学生能力者が使える魔法ではない。

ニーナは思った。

これが、かの有名な最強の傭兵にして無敵の騎士。『銀狼』、ヴァナルガンド・フェンリスヴォルフ・バトルフィールドの子供。前大戦のさなかに拾われ、最高の師の下で訓練を受けた戦いの申し子の実力なのだと。

わなわなと震えるマジエリヌに向かって、レイヴは息を切らせながら、途切れ途切れに言葉をつむぐ。

「今ので、三分の一の威力だ。次は、当てるぞ……」

「くっ……」

滅龍魔法は龍族を倒すために作られたモノとはいえ、魔族や天使族であつても直撃でもすれば瞬く間に灰燼へと帰してしまふ威力を持つている。

彼女は顔をしかめて、一步後ずさつた。

そうだ。逃げる。と、レイヴは心の中で呟いた。

三分の一というのはハツタリだつた。実際は、連戦と雷凱のおかげで魔力を消費しきつていてというのに滅龍魔法をそこまでの威力で撃てるわけもなく、さっきのが今の自分にできる最大の威力だつた。完全であつても、あれより少し威力がある程度だ。

「ここで逃げて辱めを受けるくらいなら……」

しかし、マジエリヌの足はそれ以上下がらなかった。

「ここで逃げて辱めを受けるくらいなら、ここで死んだほうがましだああ！」

「くっ」

レイピアを構え、突撃しようとするマジエリヌ。しかしそこに、静かな死こえがやってきた。

「なら、死にますか？」

マジエリヌはピタリと動きを止めた。

ただ額から汗を流しながら、ぎこちなく、首だけで振り返る。いつの間にか、彼女の首元には処刑鎌の刃が当てられていて、その後ろには鎌の柄を握っているにこやかな男ウェインの顔があつた。

「う、うわあああつ！」

レイピアで振り返りながら斬りつけようとするマジエリス。しかし、ヴェインは彼女の右手首を掴みそれを止めグシャツ

握りつぶした。

「ア……ギャアアアアッ」

絶叫するマジエリスを、ただ微笑して見つめるヴェイン。

彼の行動にレイヴもニーナも、ただ呆然とするだけだった。

彼は右足で彼女の膝裏を蹴って跪かせると、流れるような動作で、跪いた反動で上を向いた頭の後頭部に膝蹴りを加える。衝撃で上半身が前へと押される。ヴェインの足は彼女の背中を踏みつけて、手は握りつぶした手首を掴んだまま左側へと。

「や、やめっ」

ガキンッ。

鈍く、何かが強い力で外されたような音が響く。

次の瞬間、マジエリスは叫び声とも思えないほどの声を出して、そのままうつ伏せに倒れた。ヴェインはその首に、すかさず足を落として動きを封じ込め、処刑鎌を改めて首筋に向ける。しかし、彼はそれを首に食い込ませることはしなかった。

「……………」

マジエリスが何かを呟く。

レイヴ達には何も聞こえなかったが、その言葉にヴェインの片眉がかすかに上がり、次に口の端がいつもより少しだけ釣り上がった。彼は止めを刺そうとしていた処刑鎌^{デスサイズ}を肩に担ぎ直し、レイヴを見る。

「ところで、早くニーナさんを助けてはいかがです？」

彼の顔は、あまりにも清々しい笑顔だった。

「くそつ、わっちが後れをとるとは。流石は白銀聖騎士の一人というわけでありんすか……」

グアンバルテの麓、森の奥深く。そこに鉄扇の女の姿があった。何とか平常心を取り戻して這うようにしてあの場から逃げたが、まだ辛うじて立てる程度にしか回復できていない。彼女が精神に負った傷は、並大抵の者ならそれだけで死んでいた程だ。

「まずは、あのお方にこの事をご報告しなければ」

「そんな必要ないよ。カランコエ」

「!？」

突然、何処かから女の声。その姿を捉えようと鉄扇の女、カランコエは辺りを見渡すが、周りには静寂とだんだんと迫り来る夜の闇しかない。

彼女にはその声に聞き覚えがあった。しかし、その声の主はこの場に居るはずが無い。声の主は、あの学園都市で常に魔族の餌となる能力者を選別する仕事をしているはずだった。ここに出てきても万が一ヴェインに見つかるようなことがあれば間違いなく疑われるだろう。

「……おまえ、ここに居て大丈夫なのかえ？ 正体がバレかねないのでは……」

「大丈夫だよ。それより、もう少し先に飛行艇を用意してあるから、合流したら帰って休んでいいよ」

「ほ、報告しなければならぬ事も」

「そんな必要ないんだってばー。私が全て報告したもの。マジエリ又の事もね」

その言葉を聞いた途端にカランコエは俯き、その表情が少しばかり曇る。

「……やはり、殺されたか」

「うつん、掴まったみたい」

女はさもあつさりと、それが自然だといった風な口ぶりで答えた。
「何？　いつたいどうして……っ」
カランコエが聞き返そうとしたその時、ザアツと風が吹き抜けた
かと思うと女の気配は消えていた。

彼女は完全に気配がないと察知すると前に向きなおし、女の言った飛行艇に向かって進んでいく。

十

グアンバルテの一件から一日たった朝。支部の裏に作られた騎士団専用の飛行艇発着場に、空を見上げて何かを待っているヴェインの姿があった。彼の見上げる先には、蒼地に翼を開いた女神と黄色のラインが描かれたヴァルエランス皇国の国旗を揺らしながら、巡洋艦二隻と護送艇一隻が浮いている。

「これはこれは……随分とまあ大人数ですねえ」

そう苦笑していると、彼らの目の前にゆっくりと護送艇が降りてくる。ヴェインは近くにいた騎士に耳打ちした。

「ここへ彼女を」

「はっ」

騎士はそのまま踵を返して、少し離れた場所にある厳重に閉められた扉を開けはじめた。

重厚な音と共に中から姿を現したのは、あのマジエリヌという女。彼女の顔はやつれ、体は魔族用の拘束具で固められ、数人の騎士の鎧に鎖で繋がれながら力なく引つ張られている。目だけがヴェインを恨めしそうに睨みつけるが、暴れる力すら残っていないだろう。

ヴェインが、少しだけ苦笑いする。本来ならば、マジエリヌの横にいる筈だった鉄扇の女の姿が無いのだ。実はあの後、その女を回収しようと村に戻ったところ、女の姿が消えていた。地面には体を引きずった様な痕が森に向かって伸びていたが、相当時間がたったのか、周辺を探しても何処にも見つけられなかった。

その時、着地した護送艇の扉が開き、右耳に薔薇のイヤリングを付けた背中の中ほどまで届くロングヘアの女性が降りてきた。彼女は白銀聖騎士団第二部隊副隊長、クレオ・ハスレリアナだ。一見清楚そうに見えるのだが

「お久しぶりー。ヴェインたいちよー」

恐ろしくフランクな性格である。噂では、相当な酒好きでもあるらしい。ヴェイン自身はそういう事をあまり気にしない性格なのだが、他の白銀聖騎士、特に直属の上司であるクエイヌはどう思っているのだろうか。

彼女は手をヒラヒラさせただけで挨拶を済ませると、ヴェインではなくマジエリヌを見る。

「彼女？」

「ええ、彼女です。一応、手続きの一環としてご確認をお願いします」

クレオは頷き、連れて来た部下に指で合図する。部下は事前にした書類を小脇に抱えていたファイルから取り出し、マジエリヌと比較して「間違いありません」と告げた。クレオは「連れて行つて」と他の部下にも命じ、ヴェインの部下たちから一人ずつ鎖と鍵を渡されていく。

「しかし、大変だったねえ。まさか村を脅して依頼を出させて、能力者をおびき出す為の罠にするなんて……」

騎士がマジエリヌを護送艇に連行し始めた時、おもむろにクレオはヴェインに話しかけた。

「ええ、ですが結果的には、村人も少し離れた場所で野営してたので殺されては居ませんでしたし、被害もなかったので良しとしましょう。ところで……兄さんから、例の物は？」

「ああ、うん、預かってる預かってる。でさ、これの中身って何なの？」

クレオは、魔方陣を展開してそこから浮き出した長方形のケースを取り出すと、ヴェインに手渡しながら尋ねた。ヴェインはただ二

ツコリと、返答する。

「いえ、ただの武器ですよ。特に珍しくもない、ね」

「ふうん……」

ただの武器に、ここまで嚴重な封印術を付ける？　と言わんばかりに、探る様な視線を向けるクレオから、見えないようにさりげなくケースを移動させて「では」と彼は笑顔で切り出した。

「護送、御願いますね」

「あ、ああ、任せといて。じゃ、皆、引き上げるよー」

手を叩いて振り返り護送艇に入っていくクレオは、閉まっていく扉の中で来た時と同様に手をヒラヒラとさせる。

護送艇がゆつくりと空へと上がり、戦艦に守られるようにしながら北へと飛んでいく。あの三隻は今から、ヴァルエランス皇国の重大犯罪者が集められる都市、監獄都市バルエラドへと向かうのだ。

「……さて、帰りますか」

ヴェインはコートをはためかせながら、支部の執務室へと戻っていった。

十

学園都市アーリアフェルを離れてから、二時間ほどがたった護送艦隊の護送艇内。クレオはマジエリヌの入れられた牢の前にやってきていた。

「どう？　護送艇の乗り心地は……って、どうせ喋れないかー」

クレオは、ケラケラと笑いながら懷のタバコの箱を取出すと、その中から一本口に銜えてライターで火をつける。マジエリヌは拘束具のおかげで口を封じられ、今は椅子に固定されていた。

冷たく、塗装のされていない壁にクレオは背中をつけて腕を組み、指二本でタバコを口から外すと彼女は煙を吐く。

「まーったく、ホント……あんた一人を護送するために、皇国空軍の主力巡洋艦を二隻だからねえ。ビップ待遇だよ、ビップ待遇。ま、

護送艇にしか乗らないから変わらないけどさ」

「……っ」

キツとクレオを睨むマジエリヌ。それを、おどけた表情でクレオは返す。

「そんな怖い顔しないでよー。こっちだって仕事なんだか」

ズシン　と、鈍い振動音。しかし、この護送艇が揺れたわけではない。揺れたには揺れたが、そんな音の出るような揺れでもなく、むしろそれは外から聞こえた音だった。

「ん？　どしたー？」

クレオがタバコを銜え直しながら振り返って、近づいてくる騎士に声をかけた。騎士は血相を抱えて彼女の手前までやってくると、息を整えて叫ぶ。

「ほ、報告します！　右前方の巡洋艦が、と、突然爆発しました！」

「あん？」

騎士を押しつけて、クレオは操縦室に向かう。

狭い操縦室内の無線からは、爆発したという巡洋艦の放送が流れていた。

『機関部が爆発、原因は不明！　操縦不能、墜落する！　総員は速やかに退艦！　退艦せよ！　繰り返す！　機関部が』

「……どうなってるの？」

まったく要領を得ない向こうの無線を無視して、操縦士から聞き出そうとするクレオ。しかし、操縦をしていた騎士も混乱したように計器を眺めながら、同じように「不明です」と答えた。

「リーダーには何も」

ズシン　と、今度は左後方から衝撃。そこにも巡洋艦がいた筈だ。リーダーには、やはり不審な反応は見えない。無線からはもうすでに、砂嵐しか聞こえてこない。操縦室の誰もが黙り込み、沈黙が訪れたその時だった。突然護送艇の先端に何かが着地し、操縦室の視界を遮った。

『！？』

そこに居た全員が身構え、魔方陣を展開して武器を取り出す中、クレオだけは固まり、現れた何かの、いや、現れた男の胸元から目を離せずにいた。そう、先端に着地したのは、小奇麗な服装の男だった。しかし、その柔和な顔つきは優しい女性のように、敵意の欠片も表さない。そんな男の胸元には、奇怪な紋章が描かれている。それをずっと見ていたクレオは、恐る恐る男の顔を確認するように視線を上げた。その顔には、先ほどまでのお気楽な雰囲気は微塵も残っていない。額から汗が滲み、頬を伝い、そして顎先から床に落ちていく。

彼女は今、絶望を目の前にしていた。

「なんで……爵位を持つあんたが……」

男は静かに二カツと笑い、無言で魔方陣を展開する。

まさに、絶望が顕現された瞬間だった。

第9話 厳格なる報告会（前書き）

コメディー予定でしたが、諸事情により変更しました。ご了承ください。

第9話 厳格なる報告会

薄暗い会議室。ここの暗闇をかるうじて目が見える程度に照らすのは、下から弱々しく出ている青白い光だけ。部屋全体は、実に陰気で妙な殺気に支配されていた。互いが敵対しているわけではないが、それぞれがそれぞれの仕事でぴりぴりとしている中での召集だったのだろう。

部屋の中には円卓が置かれ、それを囲むように十三の席がある。今はその内、八の席が埋まっていた。この部屋に居る一人だけが実体であり、他の七人は青白く透けた体でそれぞれの椅子に映し出されている。

「それで？」と、実体の近くに座っていた一人が切り出した。

「護送艇が襲撃を受けて魔族が逃げたのはもう報告されたぞ？　しかした。それで我々が召集されたのだとしたら、納得出来ない。中級の魔族おんなどもごとき戦乙女旅団にでも任せておけば良いだろう？」

愚痴をたれた男は、手に持ったためがねの長方形の細長いレンズをハンカチで拭いて耳にかけ直すと、ブリッジの部分を中指で上げて位置を調整する。

その顔には横一文字の傷が、端から端に走っていた。その上ではヴォルケーノ族特有の獣のような目が、レンズの向こうで怪しく光っている。

「それってよ、俺たち戦乙女旅団を挑発しているのか？　おい」

メガネの男の言葉に当然の怒りを表したのは、彼の隣に座っていた戦乙女旅団の旅団長だった。金髪のツインテールに赤いリボン。ホログラムではわかり辛いが、白銀聖騎士達とは違う戦乙女旅団を示す紅いコート。男勝りな口調に比例するようにかもし出す雰囲気も男の様だが、エルフ族を示すがった耳が目立つ美しくとても若々しい女性だ。

いつもは面倒だと言って仕事を副団長のディアナに押し付けるが、

こういう会議は立場的に出なければならない。そのためか、いつにもまして不機嫌な様子だった。

その実力や権限は白銀聖騎士団とそう変わらない筈であるが、メガネの男は戦乙女旅団を女性ばかりの旅団だと馬鹿にしている所があった。

「ふん、おまえらにはお似合いだ」

「わかった。そこを動かないでくれ。今からテメエを斬りに行く」

「やれるものならやつ」

「静かにしろ」

シンと、たった一言だけで二人を静めた声。場を静めた声の主は、この会議室で唯一実体の人物、クエイ・ケスター・バルトフェルドだった。

この場に居る全員が身に着けている純白のコート 戦乙女旅団旅団長は違うが から覗く肌は褐色で、年齢には似つかわしくない染めたような白髪のアールバック。無駄のない引き締まった体つきが、服の上からでも容易に想像できる。

彼は腕を組み椅子に深く腰掛け、片目だけを開けていた。

「それよりもだ。ヴェインやセレは良いとして、あいつはどうした。またサボリか？」

「あいつのことだから、街中で女の尻でも追いかけているんじゃないか？ ハハハッ」

大口を開けて笑うまた違う男。大柄な男で、そりこみの入った短髪の下には顔を含めた体のあらゆる場所に無数の傷がある。いかにも武道家と言った風貌だ。

彼は自前の槍を抱えたまま席に座っているのだが、映像とはいえどうにもそれがうつとうしかっいたらしく、彼の隣に座っていた仮面の女性が平坦な声色でそれを注意した。

「槍が邪魔です。惨殺しますよ」

訂正。注意ではなく、脅迫をした。

「おお、すまんイエラ。たまに武器を触っていないと無いと落ち

着かなくてなあ。ハハハッ」

また大口を開けて笑いながら魔方阵を展開すると、槍をナイフほどの大きさに変化させてその中に投げ込んだ。

注意もとい脅迫をした第四部隊隊長のイエラは、相変わらずの仮面をつけたまま、感情のこもらない口元だけを皆にさらしている。

「そういえばクエイイス。ヴェインが着任したアーリアフェルに二ーナが居たというのは本当か？ お前の所の騎士から聞いたぞ」

クエイイスの反対側に座っていた一人が立ち上がり、片手を机につけて身を乗り出しながら問う。金髪のアシンメトリーに、気の強そうな目力のあるキレの長い目。妹とは違う凛々しさのある端整な顔立ちの女性だ。

クエイイスは嘆息して、その女性をカミソリの様に鋭い両目で見た。「今はその質問は関係が無い。控えてもらおう。アリシア・アランドール」

その言葉に何か反論しようとしたアリシアは、クエイイスの目により一層の力が込められた事に気が付き、小さく舌打ちして不満そうに腕を組んで席に座りなおした。

「おや、妹がおったか。……どうじゃ、うちの孫とお見合いでも」

この場においては必要性の無い会話に食いついたのは、今の白銀聖騎士団では古株の御仁だった。一件、あごひげを蓄えたどこにでも居るような老人だが、かつては副団長をも務めた人物と全員が聞いている。全盛期よりは肉体の衰えも目立つようだが、さすがは今まで生き残ってきた歴戦の勇者といふべきだろう。この場の誰よりも覇気に満ちている。

「爺、二ーナは確か十何歳だ。それに、あんな甲斐性無しじゃ結婚は難しいぜ」

「そうか……それを言われると痛いのお」

大柄な男の言葉にしょぼんと落ち込んでしまう老人だったが、すぐに今まで自分の隣で黙っていた襟の長いコートで口元まで隠している男に、孫のナナリーという女の子を紹介していた。しかし男は

ただ前を見ているばかりで、老人の言葉を聞いてもいないように見える。

クエイスはその光景にまた嘆息すると、仕切りなおしとばかりに立ち上がった。

十八の瞳が、一斉に彼を見つめる。見つめはするが、それはやる気がなさそうな目であつたり眠たげな目だったり、何があるのかとわくわくしている目やただ目尻を落として笑っているだけの目。ここに居る者の中には誰一人として、まじめに報告を聞こうという意思のある人物は居ない。

「……それでは、報告させてもらおう」

しかし内容にふれた瞬間、全員の眼が戦場を統べる者の“それ”に変わる。

「爵位級だと？ くそう、嫌な事しか予想できないな」

メガネの男が眉間にしわを寄せ、こめかみを押さえながら言う。

爵位級。

悪魔の中でも最高位である彼らが、たった一人の中級魔族を助けるために現れた。現れただけでも大問題だというのに、助けに来たのだ。“法的な手続きも取らずに”だ。

魔族は敵。それが世間一般に広がる常識ではあつたが、魔族にも国家が存在し、ヴァルエランスともごく稀にだが国交もある。取り決めもあり、ヴァルエランス領で犯罪を犯せばヴァルエランスの法によつて裁かれ、そしてその逆もしかり。しかし魔族の国家とは地続きではない。さらに言えば同じ世界ではないため、魔族による皇国での事件しか確認されてはいない。捕まえられた魔族は法廷で裁判にかけられることになり、魔族側が釈放を要求する場合は、キチンとした国家間のやり取りがされなければならないはずなのだ。

そして今回、彼らはそれを破つた。

「国家絡みなら戦争になりかねないからな。慎重な対応をするように気をつけてくれ」

クエイスが全て言い終えて着席すると、大柄の男が口を開いた。
「しかし考えてみれば、よく生きていたもんだなおまえの部下。あの高さからパラシュート無しで着地。並の能力者なら即死だろう」

大柄な男は片肘をついて、報告にあつた爵位級の資料を流し読みながら苦笑いする。

「白銀聖騎士団に、その程度で死ぬ輩は居ないじゃろうの」

「その通りだ。とりあえず、ここまでで何か」

「いやあ遅れてゴメンゴメン。女の子達に囲まれてさあ。まいったぜ」

クエイスが質問の時間をもつけようとした時、軽薄そうな声が会議室に響き彼の声がさえぎられたかと思うと、空いていた席の一つに新たなホログラムが映し出される。

「どうも、みんなのヒーロー、マルセイド・グランツ参上」

軽薄そうな声に似合った軽薄そうなにやけ顔。指を二本そろえて額に当てているあたりが、更にそれに磨きがかかるところだ。

「遅れたことへの謝罪を五秒以内にしなければ、爆死する事になりますよ」

イエラの目を覆った仮面越しの視線が、グランツを睨みつける。

グランツは肩をすくめて辺りを見渡してみるが、全員の視線が冷たいか無関心のどちらかだった。

フォローしてくれるメンツはいなさそうだ。

彼はあきらめて、イエラに向き直る。

「悪かったよ。女の子に囲まれたんじゃないくて、女の子を追ってました。すいません」

大柄な男は笑いをこらえながら、「ほらな」と言いたげな目をしている。

「残念です。あと一秒早ければ長生きできたのに」

「おいおい、許容範囲内だろう？」

「くだらない言い合いは終わりにしろ」

クエイスの声がまた会議室の中に響き、それに一拍の静寂がついてきた。そしてそれを破るのもまた、クエイスである。

「グランツ、貴様ももう少し白銀聖騎士の一人としての立場を自覚を持つてはどうだ」

白銀聖騎士は経済、政治、裁判、軍事などに皇帝や皇族に次ぐ様々な権力を与えられている。それはつまり、それ相応の責任があるということだ。グランツのような軽率な行動は、白銀聖騎士団やそれを扱う国家の不信感に直結しかねない。そういった責任能力がない騎士を解任するための元老院なる組織もあるにはあるが、解任したところで白銀聖騎士クラスの実力者がホイホイ見つかるわけもないので、ほばだまっている状況だった。

グランツは鼻を鳴らして足を投げ出すと、出席している全員の顔を舐めるように見渡して口元を吊り上げる。

「俺はさ、別に立場とかどうでもいいわけだよ。白銀聖騎士になったのだって推薦されて受けざるを得なかっただけだし。

おたくらだってそうだろう？ 実際、俺たちは“偉大なる皇帝陛下さま”なんかを拝めちゃいねえ。先代は強かったさ。そりゃあもう俺たちと比べれば天と地の差だ。でも今は違う。殺ろうと思えば

「それ以上発言すれば、ヴァルエランス皇国全体を敵に回すことになるぞ」

「いいさ、クエイス」

グランツを睨み付けるクエイスをなだめる様な声とともに、新たなホログラムが会議室に現れる。それはどの席よりも少し豪華な造りの席に映し出され、着ている服もまたその存在が別格であることを示していた。

会議室に居たほとんどの面子が、苦い顔をしながら立ち上がる。

「皇帝陛下……」

誰かがそう呟く。

「やあ」

まだ幼さの残る笑みを浮かべながら座ってくれと手で合図して全員を座らせると、予定が早く終わったんだと告げる少年。

第百十四代ヴァルエランス皇国皇帝、ウィルシュヴァンツ・アルフォンス・ヴァルエランス。

病により床に伏した前代に代わり、わずか十歳で皇帝の座に彼が着いてから早二年。天賦の才に恵まれ、幼いながら大臣や貴族たちの傀儡となることなく国の指導者としてその才能を余す事無く発揮していた彼だったが、やはり能力者として自らの力を開花させるには至ってはいなかった。

「僕はまだ弱い。それは本当の話だ。グランツがそういうのも、僕に力が無いというだけの事。自分より弱い者に従いたくないのは生物の性だ。だがいつか、僕は一族の能力を開花させる。下克上を狙うなら、今だ」

悪戯に微笑む顔を、グランツは直視できなかった。

最強の十人である白銀聖騎士団。そして、それを従えるほどの力を持つ皇帝。ヴァルエランス家だけに与えられた能力。

それはある年齢になれば徐々に片鱗を見せ、それが扱えるようになれば皇位継承権が与えられるのだが、彼は病に侵された先代の代わりとして例外的にその席に着いたに過ぎないのだ。

しかし彼はこの歳で、国家最強の存在たちを目の前にして一切の恐れを見せていない。

それは上に立つ者の器か。はたまた、絶対的強者であるがゆえの自信なのか。それとも、ただ力量の分らない愚か者なのか。

「さて、すまないが僕にもう一度、報告を頼むよ。どうせ、グランツにも言うつもりだったんだろう？」

いずれにせよ、彼はこの場の誰よりも確実に強くなる。クエイヌは心の中で、この小さき皇帝が成長した姿を思い描きながら、改めて報告を始めた。

第9話 厳格なる報告会（後書き）

ご拝読ありがとうございました。

次回は、前回と同じく未熟者同盟にてお世話になっている桐原さくも先生 詠城カンナ先生 霧咲ココロ先生が名前のモデルとなったキャラが登場予定です。

お楽しみに！

第10話 仮面は笑う 1（前書き）

文章が作業中に何箇所か消えたり切れたりしてしまったようです。申し訳ありません。

修正と確認は行いましたが、まだ何かあればメッセージや感想でお願いします。

今回から、未熟者同盟でお世話になっている道化者先生 桐原さくも先生 詠城カンナ先生 霧咲ココロ先生がモデルのキャラクターが登場いたします。

必読

本人の許可の下、登場させています。なお、モデルはあくまでも名前だけであり、キャラ設定等は実際の人物とは異なるという事をご理解ください。

第10話 仮面は笑う 1

『首尾は？』

耳にかけた携帯通信機から漏れる、テノールの心地いい男の声。

「上々。何度も聞かなくなつて大丈夫だよ」

アーリアフェルの一般居住区画にある教会の塔。その鐘楼に、灰色のローブ姿の誰かが立っていた。その声は女のように聞こえるが、フードにすっぽりと顔は隠され性別を判断することは出来ない。

『こちらとしてもマジエリヌの救出で姿をさらしてしまった分、白銀聖騎士団が……いや、あの天才くんが気が付かないか不安なのだよ。理解してくれたまえ』

あのまま彼女を捕まつたままにする事も危険だったのだ、と弁明する男。ローブ姿は、それよりも恐れている人物がいるのではないのかと問う。男は不思議そうに聞き返す。

『ほう？ 皇帝かね？ しかし、今の彼では我々には勝てないだろう』

「違うよ。もつと恐ろしい。多分、あなたでも勝てるかどうかの人」
『彼は、我々から手を出さねば興味も出さない。だが、一度興味をもたれば面倒だ。前大戦でそれは骨身に試みているよ』

「……そっか。それで彼女のことだけど、どう思う？」

『どう思うとは？ マジエリヌの容態かね』

「マジエリヌなんかに興味はないよ。魔族のくせに彼女の本質を見抜けなかったんだもん」

口元を吊り上げながら、ローブの人物は言う。その言葉に、男からはため息が漏れる。

『そうだね。よくあれほどの眠り姫を見つけてくれたものだ。これで、姫を守る茨が付いていなければより良かったのだがね。まあマジエリヌは彼女に宿る力の本質を見抜けなかったようだが……あとでお仕置きだ』

男はくつくつと気味の悪い笑い声を出しながら、正直に言えば克蘭コエの報告がなければ君の話を信じなかったところだよ、と本音を漏らしていた。

『とりあえず、彼女に近づく時はレイヴとヴェインに常に気をつけたまえ。正体を気取られてはならないからね』

「で、次はどんな手でいく？」

自分の爪の状態を見ながら、ローブ姿は尋ねた。書類でも見ているのか、男の唸り声と共に紙をめくる様な音が通信機越しに聞こえていた。やがてその音も唸り声と一緒に止まり、男が話し始める。『そうだねえ。……君だけでは辛いようだし、烙印の使用を許可しよう。あと助っ人を一人、丁度良いのが近くにいます』

どうやら男は、アーリアフェルに向かえる人員を書類から探していたようだ。ローブ姿は不服そうに言い返す。

「不満なの？ こっちの働きに」

『そんな事はない。保険だよ、保険』

「ふうん？ それで、その保険って何さ」

『クラウン』

「っ……あの道化に？」

男が冷めた声で名前を口にしたのに対して、ローブ姿は必死に声の震えを押さえて言っていた。

『少々変人ではあるが、あれでも前大戦を生き抜いた猛者の一人だ。一流である事は保障しよう。彼の受け入れ準備、頼んだよ』

男は、彼は明日辺りにはそちらへ到着できるはずだと言う。

道化。通称クラウンとも呼ばれ、何も描かれていない白塗りの仮面をつけている、どんな顔にもなれるという変装の達人。大戦後期にはその能力を買われてヴァルエランス陣営の暗殺部隊に雇われるも、今では第一級犯罪者として指名手配中の男。

「さすがに、断りたい、けどね」

「拒否権はないよ」

その指名手配される理由となったのが

当時の白銀聖騎士一名、および副隊長を含む部下の騎士二名の殺害。

通信機の向こうにいる男は、皇国を裏切った拳句に白銀聖騎士を殺したほどの危険人物のサポートしろというのだ。

さも簡単に言ってくれと、ローブ姿は恐怖とほんの少しの興味の混じったため息を吐いて空を見上げる。正直なところ、そこまでの実力を持つ人物を見てみたいのだ。うまくいけば、ヴェインやレイヴも始末できるかも知れないのだから。

「でもまあ、仕事は果たすよ」

ローブ姿は、左手を太陽に掲げた。すると手の甲を蒼い炎が何かの模様を描く様に走り出し、烙印を刻んでいく。

「魔族になる為に……」

十

グアンバルテの一件より数日後、レイヴ達の住む寮の近くにある公園の広場。そこでは、レイヴとニーナが自主練習に励んでいた。

「……今日は、疲れたな」

ニーナはレイヴの後ろ回し蹴りを屈んで交わし、右手でアッパーをきめようとバネを伸ばす。

今日は一年生全体での合同練習だったのだが、二人だけはヴェインの支持によって特別練習になっていた。特別といっても二人だけで一対一をさせられていただけなのだが。

「そうかな？ 僕は程よい感じだったけど」

ニーナの拳を交わしながら、レイヴは左足を軸に腰を低くして、立ち上がった彼女の足めかけ蹴りを放つ。ニーナは体制を崩し横に

倒れる。そこに、立ち上がったレイヴの足が垂直に落とされる。かわす間も防ぐ間ももう無い。

しまったと、ニーナは目を瞑った。

「……はい、また僕の勝ち」

伝わってきたのは衝撃ではなく、レイヴのご機嫌そうな声だった。土と草のおいが鼻をなでる。ニーナがゆっくりと目を開けると、鼻先すれすれに彼の靴底が見えていた。

レイヴの足が顔から離れ、今度はニーナを引き上げようとするレイヴの手が差し出される。彼女は苦笑いしながら差し出された手を握り返して立ち上がると、戦闘服に付いた砂ぼこりを払い落としてから呟いた。

「これで六戦六敗か……」

「まだ時間はあるよ。さ、もう一戦だ」

そういつてニーナからから距離をとって構えるレイヴ。彼のろくに汗もかいていない顔には、満面の笑顔を貼り付けられていた。

ニーナはやれやれといった面持ちで頬を伝う汗を拭い、拳を握り直す。その瞬間、レイヴが視界から姿をくらませたかと思うと、視界の右端に彼の膝が現れた。

「っ！」

咄嗟に右腕を盾にして防ぐ。衝撃。

骨が砕けたかと思えるような激痛に耐えながら、横へ飛んで距離を稼ごうとするニーナ。着地して元いた場所に体を向けるが、そこにレイヴはもういない。

「あとさ、全然関係ないんだけど」

今度は背後から声が迫る。

「何だ！」

背面跳躍。空中で弧を描きながら一回転半ひねりして着地。今度ばかりはレイヴの姿を見ることができた。彼は拳を前に突き出しながらも、ニーナの姿を目の端に捕らえているようで、目を大きく見開いていた。

驚きの目だ。

彼のそんな表情が見れたのも収穫だと思いつつ、ニーナが彼に飛びかかるうとした瞬間。

二人は途端に動きを止めて、噴水のある広場を囲む林の一点をにらみつけた。

「誰か……居なかったか？」

「ニーナ・アランドールとレイヴ・ルフォシュタイン……ヴェイン先生と妙に親しい新入生」

セーフライトがテーブルの上だけを集中的に明るく照らす、暗室の中。女は、握った写真を見ながらポツリと呟いていた。写真の中央には、糸目で白い彼専用のコートを羽織った男、ヴェイン・アルシუმетツ・バルトフェルドがいつもの笑顔で写し出され、その隣にはレイヴとニーナの姿があった。

「この子たち、どういふつもりなのかしら……」

女は顔を上げて、机の前の壁に貼られた紙を見つめた。

恋敵と題名されたそれには、多くの赤くバツテンが引かれた写真と共にレイヴがニーナと紅焰で練習している様子の写真も貼られていた。

「私のヴェイン様に気安く話しかけたり、話しかけられたり、男子女子でも羨ましい事この上ないわ」

「おい、そろそろお風呂使わせてくれない？」

扉の向こうから誰かの声が聞こえてくる。しかし女は意に返さない。

「にしても、どういう関係？ まさか。……いやいや、そんな事があるはずないわ」

「なあー、サクモも早くシャワー浴びて寝たいってさー」

「カンナちゃんー。写真まだ現像してるのー？」

声は更に近くなり、扉がノックされる。しかしやはり、カナと呼ばれた女は返事をしない。

「やっぱり早めに手を打つべきよね。私のヴェイン様のために。ふふ、ふふふふふ……」

「……サクモ、明日の朝に入ろっか」

「……うん、我慢するよ」

その後、二人は風呂場から聞こえる友人の笑い声のせいで、眠れない夜を過ごしたと言う。

第11話 仮面は笑う 2（前書き）

作者ページに本作品の更新・改稿についての情報を載せました。

第11話 仮面は笑う 2

「ふうむ、まあまあにいい所だ……」

男は、飛行艇内の自分の席にある窓から下を眺めながめて呟いた。眼下に広がるのは、広大な草原のド真ん中に位置する国立の教育特化型都市。いわゆる学園都市だ。

男の居るここは、この飛行艇の中でも一番広い、ゆったりと足をのばすことのできる特等席。四つしか席がないというのに、三等席のある下の階と面積が同じだというのは逆に落ち着かないものである。

男の周りには、ぶくぶくと太った汗っかきの男とまさに豚に真珠といった厚化粧の女の夫婦だけ。会話をするでもなく寝るわけでもなく、夫婦はただ豪華な料理と高そうなワインに舌鼓していた。

その咀嚼の音、食器と食器がぶつかる音が男にはどうにも気にくわない。こんな高い席に座れるくらいなのだからある程度の裕福層なのだろうが、もう少し上手にナイフとフォークを使えないものだろうか。

男は明らかな嫌悪を顔にふくませながら、視線を前に戻した。

今の顔は、色白で鼻筋のとおった綺麗な顔立ちの男のものだ。どこの誰から奪ったのなんて事は、彼はもう覚えていないのだろう。顔を変えられるというのは非常に便利なもので、普通なら足がついてしまう飛行艇の予約なども楽に出来る。しかも今回は向こうが金銭面を全て負担してくれるそうだ。それで調子に乗らずに、安い席にしておけば良かったかと今更ながら後悔する。

「しかし、こんな子一人を確保するのに僕に仕事を頼むなんてなあ」男は懷から一枚の写真を取り出し、その写真に写る金紗の様な髪をした少女を見た。

恐れをしない輝いた瞳。育ちの良さがわかる凛々しい顔立ち。その中にあるのは、姉への強い憧れと嫉妬。

ニーナ・アランドール。

名門アランドール家出身で、その实力は同年代の中ではズバ抜けている。これだけならそこまで確保は難しくないように思えるのだが、問題なのはその周りにいる人物だ。

レイヴ・ルフォシュタインという学生。そして配置換えにより派遣された白銀聖騎士、ヴェイン・アルシユメツ・バルトフェルド。前者も学生の中では高い能力を有していると報告書には書かれているが、男の实力には及ばないだろう。問題は後者のみと男は考えた。

ヴェインは現白銀聖騎士の中で暗殺と諜報を得意としている。もし自分の存在がばれれば、顔を変えたところで見つけてくるかも知れない。

「真正面から迎え撃つにしても……危険性大、か」

彼の風系統魔法には、一点集中さえすれば都市を魔獣から護る分厚い特殊防壁さえ貫けるものがあると聞いたことがあった。そんなでたらめな威力の魔法を防ぎきるような防御魔法を男は知らない。能力者の使う紋章魔法ではなく、魔導師などが使う詠唱魔法なら存在するかもしれないが。

さてどうしたものか、と今更になってから男が考え出したときだった。

ポーンという音の後にアナウンスが飛行廷内に響く。

『当飛行艇は、まもなく学園都市アーリアフェル飛行場に到着いたします。お忘れ物のございませんよう、お気をつけてお降りくださいませ。皆様、ご搭乗ありがとうございました。またのご利用を心よりお待ちしております』

男は燕尾服の襟を気にしながら席を立ちあがり、荷物を受け取ろうと出口に向かった。

飛行場を出れば、そこにはレンガの道。さすが学園都市といったところか、その上を歩くのはほとんどが今時の若者といった人ばかりで、道の両脇にあるのもオシャレなカフェや流行最先端を走る店で溢れかえっている。男には、今ここを燕尾服で歩いている自分がひどく流行遅れに思えていた。

被ったシルクハットを手で押さえながら、男は上質な黒革のバツクを片手に辺りを新鮮そうに眺める。

「うんうん、若いつてのは良い。とても良い。僕も、もう少し若ければやり直せたのかもしれないが……いや、ふふ、こんな事を考えるとは、僕も歳かな？」

男は空に悠然と浮かぶ雲を見上げながら自嘲ぎみた笑いを漏らす。
「まだ四十後半なんだがなあ。ん？ 前半だったかな？」

歳なんて気にした事がないからなあと、またクツクツと笑いだした男は、ふと何かを思い出したかのようにポケットからインカム型の通信機を取り出してボタンを操作すると、それを耳にかけた。

『もしもし？』

数秒の呼び出し音の後、誰かが応答する。男の口元が、かすかに釣り上った。

「ああ、今到着したよ。烙印は僕が支持するまで使わないようにね？」

『彼……なのかな？』

「ああ、直接話したことは無かったね。どうもはじめまして。どうせ学校が終わるまで合流はできないんだろ？ 僕はその間に都市内を観こ……もとい偵察してくるよ」

片方の手の中に魔方陣を出現させた男は、自分を見ている人物がいないか確認するように目だけで辺りを見やる。

『気楽でいいね。せいぜいご偵察頑張ってください？ クラウン』

呆れたような声とともに通信が切れる。

もう少し話す事があったのだが、まあそれは今度会った時にでも言えればいいだろう。

クラウンと呼ばれた男は、魔方陣の現れた手を顔に近づけた。もうそろそろアリアフェル学園の敷地内だ。といっても、敷地というだけで普通の街のように様々な店が立ち並んでいるのだが。

「さあて、まず学園から観光しようかな」

顔から手を離れた時、そこには笑顔を浮かべる健康そうな小麦色の肌をした男性の顔があった。

十

「いい天気ですねえ」

頬をなでて通り抜けていく風が心地よく、それがまたどこから甘い花の香りを運んでくる。

今日は戦闘科一年生と二年生との合同練習。教師としては、もう少しだけ早く出るべきだったのだが、どうも春先の朝というものは眠気を誘い、ベットが「あと五分だけ」という言葉を口にさせる季節だ。

「だというのにエレナときたら、お兄ちゃんの安らぎの時間を遅刻するからという理由で奪うなんて……」

半ば本気でぐずった様な声のヴェインは、昼ごはんとしてエレナに持たされた手作り弁当を大事そうに手にして歩いていた。

「ヴェインせんせーい」

誰かが後ろから彼の名前を呼びながら走ってきた。ヴェインは立ち止まり、微笑したまま振り返る。近づいてくるのは、黒い制服に二年生を表す青いラインが入っている腰まで届くポニーテールの女の子だった。

「ああ、二年生の……確か、カンナさんでしたか」

「ああ！ 覚えていてくれたんですね。感激です！」

ヴェインの目の前まで来ると、彼女は動きを阻害しない為に短く

された戦闘科専用のスカートを風に揺らせながら、ぴょんぴょんと嬉しそうに跳ねだした。

「どうかなされましたか？」

「あ、用があるのは私じゃなくて、あの子です」

にこやかな笑顔でヴェインが聞き返すと、カンナは思い出した様に来た道を振り返り誰かを指さす。

「おい、早いつてカンナあ」

「待ってよー」

指さした先には、同じように青いラインが入った戦闘科の制服の女生徒が二人、同じようにこちらにむかって走ってきていた。

「えっと……サクモさんとハーツさんでしたか。どうされました？」

「私は付き添いでー、えへへ」

頭の後ろを手で掻きながらはにかんだ少女は、カンナと同じクラスのスサクモ。東にある小国家から来た留学生だそうだ。どこかポワポワしていて見ていると和む雰囲気をもし出している子だが、前の戦術論の授業では、教室の中であるにもかかわらずなぜか頭に蝶々がとまっていたりした不思議な子だった。

（あ、またチョウチョ止まってる）

「用があるのは私です。先生」

ヴェインがサクモを見ながら和んでいると、今度はサクモの隣に居た少女、ハーツが切り出した。腰に届く美しい黒髪を靡かせスラツとした長身の彼女は、大人びたクールな印象を受ける。

勉強にも真面目に取り組む彼女は、よく先生を捕まえては質問を浴びせている。

「……というのなんですが、この場合はどうすれば？」

ハーツは自分のノートに図を描きながら、ヴェインに複数箇所での同時攻撃の対処法を質問しだした。ヴェインは懷からペンを取り出し、差し出されたノートの中にちょこちょこ何かを書きながら説明する。

「……といった感じです」

「なるほど。一箇所に向かわせるんですか」

「ええ。まあ詳しい説明はいずれ授業の方で」

「はい。ありがとうございました」

申し訳ないと苦笑するヴェインに一礼してノートをしまうハーツ。そこに、終わるのを待ってましたとばかりにカンナが割って入った。

「えっと、お昼一緒にしませんか先生！」

「？ ええ、まあ大丈夫ですが……」

少々圧倒されながらも、ヴェインは首を縦に振った。

「キヤツホオオオ~~~~ウ！」

「きや、キヤツホー……？」

カンナは両手を振り上げて飛び上がり、ヴェインは苦笑してその光景を見ていた。

その後、カンナの奇声じみた喜びの声に驚くヴェインは、昼食を学校の中庭で食べるという約束をしてその場から立ち去って行った。カンナが少々渋っていたが、今日の授業でまた会えるという事に気がつくとも早く授業に行こうと言い出す始末だ。

「やったよー。言っちゃったよー。あは 昼休みが楽しみだなあ」

「」

くると跳ね回りながら通学路を歩くカンナ。周りの生徒からは奇異な目で見られているが、本人は幸せそうなので良いのだろう。

「ほら、カンナ。そんな前見ないで歩いてたら人に って、前！」

「え？」

「おっと」

ハーツの方を向いた瞬間、何かにぶつかって押し返されたような感触。カンナの視界は空を向いて、体は腰から地面にべたんと着地した。

「痛っ！」

「ああ、すまない。後ろへの注意を怠ったよ。ケガは無いかな？」

カンナとぶつかった男は、振り返って彼女に手を差し出した。燕尾服にシルクハットという、どこかの式典にでも行くような格好の日に焼けた肌をした男だ。

「あ、はい。大丈夫です。こちらこそすいません。イテテ……」

男の手を借りて腰を抑えながら立ち上がると、カンナは制服に付いた砂を払い落とした。

「カンナちゃん、飛び跳ねながら歩くのはやめようね？」

「まったくカンナは。……すいませんでした。そちらもおケガはありませんか？」

「いやいや、これでも鍛えているからね。にしても、元気なお友達のようにだ」

ぶつかった時の衝撃はすごかったと言いながら、男は清々しい笑顔をみせつけた後「ああ」と腕時計を見た。

「すまない。ぶつかってしまったお詫びをしたいけど、君らは見たところ学生だ。先を急がなきゃいけないんじゃないかな？」

「え？ あ、はい。本当にすみませんでした。こっちも何のお詫びもできないで」

男の言葉にカンナ達はまた頭を下げる。

「いやいや。縁があればまた。今度はぶつからずに、ね。えっと……カンナさん、でいいのかな？」

「はい、カンナ・ウェンリーです！ ……ほら、サクモちゃん、ハイツ。行こつ、愛しのヴェイン先生が私を待ってる！」

「お前だけかよっ！」

「あははー」

三人は男の横を通り過ぎて走っていく。その後姿を、男は微笑ましく見ていた。ずっとずっと、彼女達が見えなくなるまで。

微笑まない理由が無い。

せつかく、いい事を聞いたんだから。

「愛しのヴェイン先生、ね。なるほど……使えそうじゃないか。カ
ンナ・ウェンリー」

第12話 仮面は笑う 3（前書き）

久々の投稿です。現在はライティングの件でなかなかこっちで書けません。

はい、言い訳ですね。

楽しみにしていたかた申し訳ないです。

まあこの作品を楽しみに、まめに見てくださっている方が何名いるかという問題があるのですが。

粗い文章ではありますが、楽しんで頂けたら幸いです。

第12話 仮面は笑う 3

教室に着いてからだった。また、彼から連絡がきた。

友人達と一緒に通学中にかかって来たのはひやひやしたが、ここならまだ生徒もまばらで、移動すれば聞かれる心配はないだろう。

クラスメイトに少し席をはずすと言いながら、『わたし』は教室から出て階段の踊場まで行くと、背を壁に預けながら通話ボタンを押して通信機を耳にかける。

「……もしもし」

『やあ。調子はどうだい？』

こちらはとてもご機嫌だといった風な口調で言う。何かあったかは知らないが、というか知りたくはないが、とにかく機嫌のいい声のようだ。

「何か仕事だね？ 世間話をするほど仲良くなった覚えはないけど」

『ひどいなあ』

その言葉にふん、と鼻を鳴らす『わたし』。

本当にそうは思っていないのだろう。彼はくつくつと喉を鳴らした笑いを通信機に向こうから漏らしている。

何も描かれていない白塗りの仮面で顔を覆った奇妙な男。他人の姿を自在に真似ることの出来る独自の魔法を使い、大戦期には多くの敵国要人を殺害してヴァルエランスに貢献した暗殺専門の騎士。そして、その力を使い味方の白銀聖騎士の一人を殺し、皇国が誇る精鋭たちの捜査の包囲をまるであざ笑うかのように摺り抜け続けて姿をくらませた第一級犯罪人である道化のクラウンは、表と裏の世界両方で畏怖され続ける存在であるはずだ。

しかし、“あの方”から直接に任務を受けたはずの彼は、やる気があるのかないのかよく分からない。

「早くしてよ。いつまでも話してたら他の生徒に見つかる」

『おや、僕と話すのはいやなのかな？ ああ、とても傷ついたよ』
今だって大仰に両手を天に向けて広げ、仰いでいるに違いない。

「そういうのはいいから、早く」

『わかつているさ。頼みたい仕事がある。なんと言ったかな。ん……
：そうそう、カンナ・ウエンリーだ。とても可愛らしい女性でね。
知っているかな？』

ほんの一瞬、『わたし』は顔をしかめる。その名をどこで知ったのか。生徒名簿でもくすねたのか？ まあ、そんなことは些末な問題でしかないし、彼にとって見れば簡単なことなのだろう。

「……ああ、わかるよ。彼女とは仲良くさせてもらってる」

『それは好都合だ。ならニーナの髪の毛、皮膚、なんなら血や唾液でもかまわない。彼女の一部がほしい。同じように、そのカンナ・ウエンリーのも』

クラウンは楽しそうに言う。

正直、気色悪い。

『わたし』は、思わず顔をしかめながら通信機を耳から離して聞こえないように変態だ、と呟いた。表面上の友情といえ、そういうのはしたくない。

「あー、そういう趣味に協力するのは……」 通信機を改めて耳にかけ直して言つてやると、彼はまったくもった笑い声を漏らしてき
た。

『まさか。ただ必要なだけだよ。残念だが、君が言うような変態ではないね』

聞こえていたらしい。そのまま、クラウンは続ける。

『わたしが心臓を奪えば手っ取り早いけど、そんなに何回も使わないだろうし。それに、マジエリヌのようにニーナを殺そうとするわけには行かない』

怒られるのはイヤだからね、とふざけたように付け加えるクラウン。
ン。

「ふうん、まあいいよ。多く必要かな？」

心臓を奪えば手っ取り早いというのは気になるが、何か魔法の媒介に遺伝子が必要なのだらうと、『わたし』は推理する。

『そうだなあ。使用する回数によるけど……まあ集められるだけほしい。方法はお任せするよ』

「了解。ほかに」

そのとき、『わたし』を探す声が廊下に響いた。腕時計に目をやると、もうそろそろホームルームの時間だ。クラスメイトが呼びに来たのだらう。

そつと、声がした方向からすぐには見えない位置にずれながら、もう戻るとクラウンに告げて通話終了のボタンに指をかけた。

『残念だ。もう少し親交を深め』

「切るよ」

ピッ、ツーッ

そのまま通信機をポケットに滑り込ませると、踵を返して階段を駆け上がり、探しに来た友人に向かって声を張る。

「今行くよー」

今日は合同訓練の日だったか。なら、その時にでもいただこう。

そう思いながらわたしは、友人に向けて笑顔を見せる。

（作り笑顔にもなれたな……）

「なんだそれは」

それが、ニーナが今日、レイヴに挨拶よりも先に、一番最初に言った言葉だった。

朝起きた彼女は、いつも通り自室に備え付けられたシャワーを浴びて歯を磨き身だしなみを整え、さあこれから学校へ向かうかと察を出たところで、今の言葉をレイヴに言っていた。

レイヴはあるモノを握っていて、それをニーナに差し出していたのだ。

それは能力者や魔法を極めようという者なら、いつか身に着けることを夢見るであろう純銀製の装飾品。自らの魔力が高いことを意味する、強者の証。

銀装だった。

「なんだそれは」

だから、もう一度言った。

今度は学園に向かいながら、歩いて言ってやった。

「なんだと言われても……銀装だとしか」

「そんなことはわかる。聞いているのは、なぜこれを私に渡すのかということだ」

そう言われるとレイヴは言葉に詰まってしまう。

銀装は元々、上級の能力者や魔術師が己の力に飲み込まれないためにつける物であって、ただの学生がつける例はまれ。能力の低い者がつけても、ただ発揮出る力がなくなるだけだからだ。

ニーナの力は確かに大きい。しかし、どう考えてもそれまでではない。確かに量的にはレイヴを凌ぐかもしれないが、本人は扱いきれてもいなければ、その量に気がついてもない。だから一般の能力者でもその魔力には気がつくにくく、余程の事がなければ暴走もありえないだろう。と、レイヴは思っている。

彼には渡す理由が分からなかった。ただヴェインが渡せというから渡すだけでしかない。

「だいたい、昨日渡せばよかったじゃないか」

その声で、レイヴは黙考から現実に戻される。ニーナは、ジトツとした横目でレイヴの持つイヤリングを見ていた。横に差し出した手を戻すに戻せないレイヴは、ただ苦笑する。

「いや、渡そうとはしたんだけどね……」

昨日の晩は、誰かに見られていた気配に気がついた後すぐに解散した。解散といっても同じ寮なので帰り道も同じなのだが、レイヴはグアンバルテの事もあって周囲に注意を払いながら帰ったため、渡すような暇が無かった。というよりも、頭の中がニーナの魔力の

ことから完全にシフトしてしまい、渡すという事も忘れていたのだ。よくよく考えてみれば、魔族が白銀聖騎士団の在住するこの都市の中に進入するのは難しいことでもあった。

（それにしたって……）

彼女は銀装を受け取るのがイヤなのだろうか？　どうも彼女の目を見ていると、怪しんでいるというか嫌そうな感情があふれているようだった。

レイヴは本人が受け取りたくないと言うのだから仕方ないと、銀装を持っていた手を引っ込める。

「そっか、うん。いらないか……」

ヴェインに何を言われるか分からないが、そこは覚悟しよう。と、心に決めたとき。

「いや、まて」

「え？」

ニーナの視線が、レイヴの顔と自分の手元を行き来する。その様子に顔を傾げるレイヴは、ニーナの顔を怪訝そうにのぞき込んだ。

すると、彼女は顔を真っ赤にして、一端斜め上に視線を向けながらレイヴを自分の視界から外すような仕草をすると、そのまま気恥ずかしそうに目を閉じて最初はもごもごと口を開き始める。

「貰ってやらんことはない。うん、貰ってやるう。でも、しかし着けるかどうかは、その、あれだ。別だな。うん」

「え、ええー……？」

レイヴがまた首を傾げる。貰ってくれるなら、彼としてはつけてほしいのだ。でないとヴェインに何をいわれるかわかったものではない。しかし、ニーナの様子では今すぐにつけてくれる事はないだろう。渡しただけである。それはやはり、ヴェインに何か言われるのではないだろうか。

ふと、そこでレイヴはニーナの異変に気が付く。

「……なんだ。文句があるのか？」

キッと赤い顔のまま睨み付けるニーナの顔には。

「す、すごい汗だよ？」

それに、目も焦点が定まっていらないように思える。

しばらく同じ学舎にいてわかった事なのだが、彼女は感情が表情に出やすいようだった。喜怒哀楽がハッキリしていて、とても分かりやすい。

（今は…… すごく焦ってる）

いささか、その感情を読み取る側に問題があるのだが。

ニーナは先ほどとはうって変わり、早く渡せと手を出してきた。さらに怪訝そうな顔になったレイヴだったが、受け取ってくれるならその方がいいとその手にそつとイヤリングを置く。

その後は二人の間に会話はなく、そのまま学園の並木道を通り抜けて玄関、階段、そして教室へとたどり着いた。会話がないうのは教室に入ってからと同じで、レイヴはただ気まずそうに黒板を眺め、一方のニーナは銀装を眺めたり、耳に当てるガラスを鏡にして確認したりしていたかと思うと、はっと何かに驚いたような表情をしては顔を横に振るといふ、レイヴにとってはかなり不思議な行動を繰り返すだけだった。

自分には似合っていない。と、彼女は思っているのかもしれない。レイヴは彼女の不思議な行動の理由を、そう思うことにした。

（似合ってると思うんだけどなあ……）

しかし、それを口にするとか怒られそうな気がしたので、レイヴは言葉を飲み込んで教室を見渡した。

リンやシャルロットは席にカバンがあるものの教室にはおらず、

「やー、お二人さん。今日もラブラブかい？」

「よっほー！」

からかいと元気な挨拶と共に、クラスメイトのリンとシャルロットが教室に入ってきた。ニーナならリンのからかいに反応しそうなものだが、生憎とお取り込み中のためかシャルロットの声しかまともにも聞こえていなかったようだ。

レイヴはいつものことと軽く受けながしてしまっている。

荷物は既にそれぞれの机の上にあつたので、どこかで暇つぶしをしていたのだろうか。

「やあ、リン。シャルロットは元気だね」

シャルロットは「えへへ」となぜか自慢げになる。しかし、リンはレイヴのその言葉に何も返さずにニーナの目の前までやってくると、両手を腰に当ててにやりと笑った。

「……ん？」

気づいたニーナは、すこし朱に染まったままの頬を、不思議そうにリンに向けた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9564f/>

白銀聖騎士への盟約 pledge

2010年10月10日15時32分発行